



正類

記ス通りノ次第ニテ彼ノ我深民遺害云々ノ事ハ  
毫ニ疑ハキナク全ク無根ノ説ト奉存候且内外往  
來ノ親疎接遇ノ厚薄等ハ一ツ田ニ変ルナク就テ  
ハ尚將來御着手ノ如何ヲモ懸察候処魚ノ御内議ノ  
運ニ相成候ハ、心ヲス何カ其目的ヲ達シ其端緒ヲ  
得ハキ時ト奉存候間即別紙見込書封呈仕候可然御  
評議、上宗大必ニハ速ニ下向相成候孫金望致候小  
生儀ハ少時滞韓仕候間即随行尾間故治上京為致候  
實地見聞ノ事トモハ親シク御質問被下候様仕度候  
此段上申候也六月二十一日

外務省六等出仕森山茂申候

小生謹テ命ヲ奉シ朝鮮國ニ航シ草梁館ニ入り其目  
論一變ノ原由内外往來ノ新政持ニ我深民遺害ノ事

等靜心探察テ経底ニ深民云々ハ毫モ疑フヘキナク  
其同論一變ノ事原由確知スルニ由ナシト雖モ凡韓  
人ノ言語ニ慎成テ加フルハ苟シクモ我邦韓輩ノ類  
ニアラス然ルニ春冬來傳テ韓人ノ傳延セシ談話  
ヨリ方今ノ形勢等ヲ探察スルニ必クス別紙探聞書  
ノ他ニ出サレモト存候且暗行御使我懸察使ニ類  
威權最大ト  
ノ普ク探偵スル處ハ兩間祖隔ノ本末及ヒ田東某  
所使訓導等ノ奸謀ニ探及シ曾テ田所使ハ免斥訓導  
ノ浮沈モ亦且夕ニ迫リ其他奸細ノ輩狼狽遂ヲ失  
スルノ形状等最モ我ニトリテノ一好亭ナルハ論及  
テ茲々廿ハナリ特ニ久未弁テ願ミガハカコトモ田  
交ヲ再叙セシテ示レ暗ニ入送使ノ復來ヲ求ハル  
等抑我ノ喉位ナルモノニ均シ然リ而シテ其内紛ノ

大文類

基スル所即チ邊情ニハ兩國交際ノ事ニ一端  
ニ係ルコト益シ我カ約ヲ納ムルノ牘トイフハキナ  
リ於茲序次就列詳々我カ誠意ノ表スルニ至ラハ  
恐ラクハ三國投種ノ惑アラシムヘシ而シテ尋盟ノ  
端緒ヲ得一面自ラ更ムルノ地位ヲ占ムルニ於テハ  
敢テ殿功速成ヲ欲セス舒々其法ヲ講明シ懇々其道  
ニ勸誘スルハ必ラ難キニアラス今也現地ノ形勢  
ニ於ケル疑フヘキ無ク一昨セシムヘキ無ク其理勢  
ノ端スル所魚ノ外務大臣宗重正渡韓可被御旨御内  
議ニ酌當ノ好機會ヲ奉存候即十五等出仕尾間啓治  
ヲ以テ此段上申仕候實地見聞ノ事ハ今人へ御下問  
被下達ニ御評決ノ程企望仕候小生儀ハ尚將來ノ動  
靜ヲモ伺ヒ後圖ノ一考ニ充クシメ度暫ク滞館臨機

對馬ニ退キ何分ノ御指令可奉行候敬白 六月日久

朝鮮近情探聞書

一朝鮮國々論ニ變ノ事ハ昨冬ヨリ當春ニ涉リ專ラ  
流布ニシ傳説ニ頃日清國政府ヨリ邊情兩國交際ノ  
ノ事ヲ改革ムヘキノ命アリ其故ハ戊辰年未日本ヨ  
リ本々所ノ便負ヲ存ケ其述ル所モ聽允セス御善  
隣ノ道ニ違フ今若シ日本ト和ヲ失ムルハ同ヨリ長  
策ニアラス宜シク田諷ヲ取ムヘシト於茲國論ニ變  
ノ端ヲ啟キ終ニ大院君田王ノ冥父ニシテ暴政ノ間  
ニホリトノ弊ニ崔進士ト云人領議政ニ上リ因王ガ機  
ヲ親掌スルニ至シ想フニ不日邊情ニ變ノ舉アラシ  
乎然ラハ東萊府使鄭爾德訓導安俊卿ノ如キハ必ス  
免免ニシテ兩間ノ互市田一復シ西氏欲好ノ地ヲ得

一、此中夜間濟商ノノ館ハル韓氏等ノ密話  
ニ係ル而シテ其頃ハ尚麻間ノミニシテ其形象ノ見  
サリシニ漸次物語シ果シテ大立監司慶尚全道ヲ統  
ノ事ノニ魚鱗シ始ノ東萊府使ニ免黜ニラレ訓導  
及ニ陪通事崔在亨兩國ニ介ニシテヲノ如キ物然  
其指ク所ヲ知ケス且其頃郡城ニ變火ノリテ數日延  
焼スト内紛ノ情想像スルニ足ル

因云曾テ在ニ海領軍館ヨリ申告中清國政府ヨリ  
軍艦ノ遣ハシ一ハ進貢ヲ促シ一ハ我日本ト和ヲ  
失スル勿フニコトヲ通スト面説太々暗合スルニ  
似タリ

一、近來暗行ノ御使即監察ノ官文敷負東萊ノ梵魚寺  
ニ采ル其本任人姓ハ朴名ハ健休ト云フ蓋シ新東萊

府使朴濟寬、唱ニシテ漸々三十二先々ト付負  
中新大立監司、男前鎮覺并一廣州ノ人鄭光範等ニ  
之ニ從ヒ和露ノ進傍ニ微行シ來リ交通間絶ノ事情  
及ヒ田東萊府使訓導崔在亨等ノ奸跡ヲ探リ且戊辰  
年某彼此相往來スル書類中若クハ田府使等私ニ袖  
藏ニルモノ、ハシカト疑ヒ陰クニ探史ノ館ニ放ツ  
テ館商ニ記テ其子係ノ書類ヲ索ノ頻リニ交際上ニ  
心思ヲ勞スルノ警ニナリ且其探史ノ所帶ノ馬牌等  
也モ亦ハルニ足ル内ニ我ニ亦從來往復スル所ノ  
書ヲ摘拔シ館商ニ内付シテ之ヲ投ヒシム又朴健休  
館商古谷某ト筆諾アリ其割賂ノ間彼カ拳止如何ヲ  
推尋スルニ頗ル川交ノ絶ニコトヲ恐レ切ニ府使等  
ノ輕慢ヨリ生セシ事ト云フ諷スルカ如シト鎖々々

ル筆話トイハドモ其意淺キニ非ス最モ内情ヲ穿ツ  
ニ足ラシカ

一訓導安俊卿ハ大抵君眷顧ノ蒙リ奉職既ニハケ年  
ニ過ヒ田東幕府使司成ノ好史ナリ春來忽然西人共  
上京ノ旨ヲ奉ケシニ久シク邊情ニ從事シ今西人共  
ニ此地ヲ去ル時ハ必ス他ノ誰ミヲ求メント因茲訓  
導漸ク止メルヲ得タリ然ルニ其頃ノ風説ニ代任玄  
徳氏トルモノ不日下向スト而シテ尚未タ果サズ且  
今ヤ俊卿訓導ノ仍任クルモ御使推亂ノ事アルカ故  
ナリ其間職ニ居ノシム必ラズ放免セラレント訓導  
田思暴露ノ秋ナルヲ苦思シ不敏能安眠ト又崔在守  
ノ如キ時々館ニ記キ傳語ノモノニ接話スルノ間時  
勢ノ変ニハ歎ムヘカラスト平常痛飲ノ癖ナルモ拂

然禁酒ノ示シ手ニ杯ヲ觸レス悶迫ノ状辞色ニ頭レ  
配解可矣ト

一我國民ノ潮流モシハ昨冬鹿兒島人ノ一次ニ止リ  
其後絶テトシ且我國民ヲ殘害シ等ハ今ク無狀ノ  
流説ニシテ毫モ疑フヘキナシ且相澤氏送還ハ通例  
依旧事簡易ニシテ意テ解ナリ

一宗大丞復任ノ事既ニ韓人ノ聞知スル所ト雖ヒ前  
ノ對馬太守ハ即チ外務大臣ニシテ東京ニアリト曾  
チ其知ル所今更ニ恠異トシテ如シ然レトモ  
往々小通事等殿様ノ渡韓アルハ早晚頃ナリヤヤト  
ノ語ヲ呈シテ最戸息ヲ聞カフモノ多シ且上下交  
送使ノ回復ノ欲セヨルモノナシ  
一内地ニ征韓論ハ清國新聞ノリ之ヲ知り肥前ノ一

大正  
九年  
九月  
二十  
日

舉ニ亦聞知シ臺灣ノ事モ早既ニ傳致セリ凡對州一  
傳播スルノ風説ハ事人小トナク彼レニ通達セサル  
ナシ彼國ノ内向ニハ我日本ヨリ大軍攻来ル等ノ流  
説モアル由小生此度對島滯泊ノ事彼レ之ヲ聞知シ  
其奉勤ヲ窺フノ意常一倍スナリ是偏ニ我邦方今ノ狀  
勢ノ恐察スル所ヨリ生スレナラン然ルニ從來外務  
使員等ノ渡来スルヤ彼レ必クス商路ヲ閉塞シ市人  
ヲ威縮スル等小波瀾ヲ起シ館内ヲ窘却ナサシノ敢  
テ使員ノ久シク留在スル能ハサルコトヲ計ル是彼  
レカ通達ナリ今也不然小生渡海ノ前幕ニ閉塞セシ  
商路モ還テ渡海ノ後ニ開ク番船モ亦漸ク緩ミ彼ノ  
崔在守ノ如ク願ハ献媚ノ語ヲ呈スルニ至ル是蓋シ  
餌ヲ啗ハシテ我欲尚ノ探ラントスル固ヨリ然リ而

シノ其間真情ニ無キニ非ス又一通事ノ語ニ兩國  
ノ交通其宜トニ歸セサレハ甚ク苦悶也且進米等ノ  
銃器ノ新造シ以テ試發スルニ藥力ニ破裂シ敢テ用  
ニ先ト難キモノ多シト是等ハ最モ災狀ヲ吐露スト  
云フ可シ

一昨秋米熟水々薄シ年凶ニ屬ス然レトモ其米價ノ  
我邦ニ比スレハ凡三分ノ一ヲ減スルニ似ナリ且進  
米錢貨ノ流通ヲ支ヘ物價沸騰スト其故ハ清錢混用  
ニシヨリ清錢充テテ韓錢ニ入因テ清錢ノ流通ノ停  
ノ之ノ改鑄セント官ヨリ令ヲ下シ韓錢ニ百孔ヲ以  
テ清錢ト百孔ニ換ヘシム館内ノ商法モ是カキノ  
阻害シ日用奧菜ノ買辦ヲモ支ヘ因シムニ至ル  
館内出入ノ小通事及ヒ傭人市人等往來日ノ如シ

大正  
九年  
九月  
二十  
日

陪通事等モ歸ヨリ之ヲ召セハ未ツテ公務ヲ兼リ得  
過、餘裁又ニ変ルコトナシ然ルニ陪通事程在守ナ  
ルセ、田東東萊府使訓導等ト合商ヲ企テ射利ヲ營  
ミ、ヨリ凡第行ノ事百重在守ノ任スル所ニシテ公  
幹ノ弊引商路ノ閉塞セ亦之カ喜怒ニ成ル今度暗行  
ノ御使訓導ヲ召テ曰ク汝等私ニ括商ヲ為シ巨財ヲ  
貪取スト其得ル所數ヲ盡シテ官納セヨト又在守ニ  
商法ニ干與スルコトヲ嚴制セヨト是未ノ未終ヲ辭  
ト不日都中ト唱、免許商人數名入解シテ公然通商  
ヲ始マルト云ヘリ

朝鮮進哨探聞書

五月十九日小通事金福珠ト申ヒノ入未申聞候ハ私  
一ニ在守カ惡言ニ依リ五七年前小通事召放ガレ難

儀イタシ居リ候内今度新府使到任後旧ノ如ク通事  
ニ致出相勤候然ルニ近本内外絶交同様ノ形ケニ  
テ私ニモ御存シ通り數年陪通事ニ相勤ノ是マテ内  
外ノ事ニ存シ罷在候事故大ニ掛念ノ事ニ御坐候  
実唯今ノ通ニテハ外向ニ凌キ取レ不申如何トナレ  
ハハ送使渡ニレサル故ノ事ニテハ送使渡辭ニ相成  
候ハ外向ハ自然ト融通イタムコトニテ候イヨク  
々ハ送使ハ渡辭ニハ相成リ不申候哉  
ハ送使ノ、トハ今更不申トテ追々傳聞セ可有之送  
ニテ渡館ニハ不相成事ニ候  
私ニモ左様ニ考へ居リ候併シ外向ニ於テハ明年ハ  
ハ送使渡辭ニ相成ル續リ、以テ方々ヨリ集收ノ米  
米ノ登山ニ取立テ居リ候是マテノ通米回運次第館

所入送ト申都合ニ相成リ不申故明年條ノ米本  
皆濟取立候ハ釜山倉一積ミ不切以聞新倉建立ス  
レト申ノコトニ候

明年ハ送使渡館ノル申ハ何方ヨリ其説出候ヤ  
是モ在守ヨリ出候説ニテ是マテノ如ク任官ハ就館  
スルハ無御坐候故諸事在守ヨリ申出候儀ハ奉行ニ  
相成コトニ候此者陪小通事ノ職ニ居ノハ國事ヲ誤  
リ申候前年ヨリ追々御應對ニ相成リ居リ依御用申  
トテモ京師ニハ貫徹イタレ居マシク考ヘ候其内  
一ハ田府使モ不心得コト可有之カト察シ居リ候外  
向ニ於テ專ラ取沙汰イタレ候ハ如田隣交相聞ケ候  
一ハ田府使訓導在守ノ三人ハ稟示ニモ可相成トト  
取沙汰イタレ候

一 京極内々ニテ御咄シ申上候田府使訓導此二人日  
本ノ遣ハサレ候都合トモニハ無之ヤニ考候

得罪タル田府使如何ノル故アリテ日本ハ遣ハサレ  
候ヤ

其事ハ得罪タル府使ニ候ハトモ是マテ内外塞リ候  
譯ハ此ノ府使ト訓導ト為シタルト故朝廷ヨリ此  
兩人ヲシテ是マテノ行ト道ヲ問ハレシメノ態ハ此  
兩人ノ遣ハサレ候事ノ由ニ候如何トナレハタトヒ  
日本ニテテロレ候テモ自ラ仕タレシコト以此  
兩人ノ遣ハサレ候事ヲ相見ニ候今殿様御座候  
川一州成テ居候  
殿様ハ外務大臣ニテ東京ニ被成御坐候  
右此兩人對州ハ参リ候ニ接待スル人可有之候



對州ハ、新州ノ事ヲ掌トル官員有之候

此州此事ハ先キテ御見分有之度人々シカレテ事ヲ

考ヘ候ハ、御知ニモ可申候

一今東萊郡ニハ御使参リ居レ候

一訓導ニ交代ニ相成答交リノ人ハ、徳氏當任未月一

バ、我六月七月ニハ下來ニ可相成日積ニ候下來

ハ、逆引スル程ヨロシク候

如何ノ譯ニ候哉

可成、御使上京後交代ニ相成リ候ハ、尚人郡合宜

シカレ、シト考ヘ申候

石ノ通り内諸承リ候也

住 永 辰 安

六月十四日

浦 類 裕

通事在守ヲハシメ其他三陪通事共裕旅宿ハ一同

罷出渡海ノ祝詞等用畢

裕

訓導ニハ新占交代ノ節次モナクシテ上京ニ相成候

様嚴照ニテ承リ候事ニ候哉

在守答テ

交代ノ節次無キニハアラス代員玄徳氏ト交代故命

候ニ引續キ旧訓導ノ人仍任ノ命下リ候付未。在府

イテ、本府候事ハ俗談ナリ

六月十四日

守門番ノ通事全福珠、一モノ罷り出應酬左ノ通り

此等ノハ若年ノ此口ヨリ將トニ懸意ノモノ  
テ向キニ在守ノ所為ニヨリ通事石成トシ當東某  
下東ノ上復役マシ者ナリ

全福珠ヨリ

僕儀向キニ在守ノ為ニ被退候ニ當府使下東ノ後  
又々復役被命候御悅可被下宿昨々守門番ニ罷下候  
モ実ハ僕カ番次ニ無之候ハトモ公ノ昨日御渡着ノ  
由ノ承リ申住永殿ニモ内話イタシ度儀ニ有之者実  
ニ聞忍候後相咄可申趣約定モイタシ置候処今程果  
シテ十分見認候付是ニ密語イタシ置度旁以テ他人  
ノ番ヲ振替リ罷下候下相替守門番ノ外館ニ記キ候  
事雖相成右ノ通り計依テ罷下候

反寄

其譯ヲ聞

福珠

去比ヨリ東冬達邊ハ暗行ノ御使入込ニ相成居候  
哉ノ風聞有之候処此程豈科ラシ候ノ両度マテ被為  
下問有之候ハ日本國トノ交際斯ク多年阻隔ニ及ヒ  
候儀難解石願キ查察ノ為命ヲ奉シテ罷下リシナリ  
聞ケハ其方前府使在職中ニ罷ノラシ當府使ヨリ邊  
情熱知ト云フヲ以テ復役被命シ趣民間ニ探聞セシ  
ナリ兩國通交ノ如斯阻隔ニイタル由縁不包可申出  
候

福珠

私儀ハ館ニ守門番ニ奉ハルノミ邊リニ館門ニ入ル  
ニ不致許唯臨通事等ハ日々自由ニ館門ニ出入致シ

冊  
正  
美  
冊

候間業等コソ存シ可申候

御使

在ニノラス憚カル事ナクシテ可申上

福珠

御最問難默止可申上候ハトモ前侍使訓導並在在等  
ノ最節有之候ハ兩國交際ニ係ル事ノ少シタリト  
モ口ノ開ク事ハ乍ナ首領ヲ失ハシトノ事ニ依ヘハ  
僕一人ノ小通事ニテモコレ無ク遊ミ出テ微命ナク  
ラモ可矢理ハコトナキ譯ト奉存候

御使

前侍使ハ上点ノ後ナ遠役ニ相成リ訓導ハ姑ラク仍  
任ノ命ノレレトモ突ハ石查最中ノ間ヲ扱否置ナリ崔  
在侍等如キノ暢ルコトナク可申出

誓ノ汝ニ受害アルニシキナリ素ヨリ此方モ館見物  
トシテ館ニ就テ見送ケ存スルトヨロナリ

福珠

館見物トシテ館一御就テ可有ハ尤モ宜ニキ御賢慮  
ト奉存候也角日本人ノ申シタル語ノソ証據トモ相  
成ヘク候

御使

汝館ニ就テ密ニ日本人ノ意味ヲ考見詮議ノ端緒ト  
可相成事ノハ可申出  
守門番ノ外罷下リ候儀不相叶不達番次ニモ相成候  
間罷下リ候ハ通ハ然素ナリ見可申候  
福珠 答ニ向テ曰  
右御使ニ問答シシ次第如何ニモ大切ナル儀ニテ答

大  
文  
類  
集

馬ニ御密話申兼テ候ハトモ唯今ノマ、ニテハ兎角  
兩間相濟シテ外向、於テモ歳遣船走ノスシテハ  
困難ニセマリ候人夥シク被レ此レ恐念不少公ニハ  
年々殊ニ御整命被テ置御心底ヲモ能ク存シ居リ候  
ニ付無ニ念御密話ニ候御使査調ニテ府使訓導  
并在守管公幹ヲ中間ニテ整葺ヒシコ成ハ許好ノ所  
業コレアリタル儀披露ニイタリ候ヘハ乍訓導在  
守ハ没収ニイタリ可申而シテ后ケハ僕兩間ニ往來  
シテ必クス御交際ノマトマリ候端緒ヲ開キ可申  
庶幾、ハ御使々又ハ其隨史カ館ニ就テ來テハ公幹  
是々テ、始末ヲ被テ尋問ニ隨ヒテ御應對可被成候  
止ツ貴邦ヨリ被仰辨候御主意ノル所ハ何ニ  
候、ン

裕

當初内詳ニ御渡シ成レシ口陳書ヲ以テ掲示ス  
石ハ相及山樹所帯、書契ノ寫ナリ

福珠

此書ハ持子婦リテ不若ハ借用イタシ度候

裕

公幹ノ書付ハ私ニ難貸渡馬トテ簡テ候

六月十五日

福珠相見ニ候付

裕

無テ承、及ヒ候ハ御使々ル人ハ誰人ニ探索等被委  
候節ハ印鑑又ハ小口書様ノ物証並ニシテ被相渡候

加正業典

事ノ由承リ居候処何ソ受取居候哉此等ノ物ナクテ  
ハ万一發露ニ及ヒ候節編縫不相成貴サマ身ハ大切  
ニ及ヒ可申ケト掛念ノ余リ相尋候

福珠

夫レハ不然館ニ記テ要路ニ懸ト探問シ来レト被命  
候儀ナラハ譬ハ從前ノ手數ハナシトモ確証可受取  
ハ勿論ナレトモ此節ノ所ハ唯僕カ分ヲ以テ館内路  
傍ニ意味動静ヲ何気ナク相考ヘ見候様トノ譯トハ  
確証可申請譯ニ之レ無ク候御仗即今梵魚寺ニ被居  
候ニ付明日門番畢リノ退キ候后テ梵魚寺ニ罷リ出  
内分報スヘキハ折柄守門番トシテ罷リ下リ折々館  
ニ就キ何気ナク相考見候処果シテ我國ノ御所分ヲ  
卑劣ニ処置ト存シ居リ候気味ニ相見候尤モ當時館

内店込ミノ商人等ハ多クハ在守入魂ノ旨トモニ候  
ヘハ其説信シガクク且兼リ候ヘハ近頃渡来ノ人モ  
有之是等ハ言語ニ通シ公幹筋ニ関係ノ人ト存シ  
候ヘハ屯モ角モ御入館御親操可然ト存シ候趣報告  
イマシ置キ可申左候ヘハ多分入来之レアルヘク其  
節方般御手技トク御應對可被成候

六月二十日

在守入来リ

申聞ケ候ハ御依頼申候ニ私情ノ様有之候ヘトモ終  
ニハ公幹ノ大切ニ係関可致儀故極密申入レ候必ラ  
ス他言不被下シテ御旋カ希申候別儀ニモ無之我國  
邊情ニ交シ當春前府使共訓導共京師ヨリ急々上京

在守入来リ  
間  
...

加正業典

ノ命下リ依然ル也 府使ヨリ内報状有之候ハ當今邊  
情平常ノ時ト違ヒ不容易驅引中ニ候ヲ兩人トモ一  
同被召登其跡不体認ノ人ニ任セラレ候ヲハ果シテ  
國守可生モ難量仍テ御下問ノ儀モ候ハ一人ツ、  
被召如何可有之哉ノ旨被申上候処其回下ニ先ツ府  
使ノミ上点セシノ訓導儀ハ姑ラク在府タルヘキ旨  
中未候付即チ前府使上京ニ相成候其譯ハ万國ト交  
際數年ヲ經テ纏リ不申ハ必克府使訓導居間詳好ノ  
獎アルニ似タリト

朝廷ノ疑慮ニ出テ候譯ニ被考府使上京ノ上色々被  
陳候テモ御疑訝不解次ニ前大立監司ヲモ被召登先  
般兩所トモ新官被差下候処猶モ御疑念不已昨今新  
大任ヨリ御使一員此人ハ今東米外ニ衛前十六負相

新府使  
御使  
御使

御使  
御使

除被差下兩問其合ノ願未必至探索中ニ候処日前御  
使草染ノ民間、信宿中商人古谷豊次郎設門ニテ遊  
遊出逢互ニ華談ニ及ヒ候趣某府へ聞及シ府使訓導  
被申談御使一行此集ノ枕魚寺へ内解將差左石兵房  
等ヲ被差還筆旨ノ書ヲ被請候ヘトモ御使返答ニ我  
ヒ々々此拳アロハ奉命ニ出テナレハ私ニ書類御  
目ニ具候儀不相叶趣ニテ御遣ハシ無ク當惑ノゾマ  
リ府使訓導ノ内藏ニ幹傳官此ホド渡館ノ由承リ候  
ヘハ崔在守ヲ以ノ此人へ依頼シ館内ヨリ取出シ見  
度ト申スニ帰シ候一被申付候商人等前後ノ行道モ  
不辨イカ体ノ儀ヲ應酬シ候戎品ニヨリテハ兩問ノ  
生梗難量依テ訓導ヨリ何分ト御盡カク以テ一見イ  
タリ也被下候様トノ事ニ依古谷ハ再會マテモイタ

見廻之八

正業

シタル由再度日ハ一代官聞召ヒ為有之哉ニ候ハ  
此書極テ一代官ニ可有之右ノ外総島ニモ朝市詞ヲ  
以テ何ヨラ應接イタシタル由西人方へ相尋申シタ  
ル共不申聞候間何分明日明後日ノ間可罷出御盡ク  
着申候

裕

其書未々可有之哉其人ニアラスシテ漫リニ筆談ス  
ルハ元來被禁所ナレハ若シクハ火中共ニハイタシ  
不申候哉費採ノ説ニテハ一代官聞召ノ上出館シタ  
ル事ナラハ角ド不立採ニシテ一代官ニ依頼イタシ  
見可申也

後日在在守入來候ニ付筆談ノ書ハ果シテ當人火中  
イタシ居候趣返答ニ及置申候

六月二十二日

百官ノ韓人一員陪從四カ名騎馬ニテ守門へ來リ和  
館へ就カント欲セシテ守門將府候ノ門帖無キヲ以  
テ拒テ不入故ニ不滿ヲ據シテ多太浦ニ向テ去ル因  
テ浦瀬裕出館通行ヲ待テ果シテ館外東邊第三ノ伏  
兵所ニテ遇入問答立ニ記ス

裕問

行客ハイカナク兩班貴人ヲ云ナラン

行客答

吾輩ハ暫ラ路ノ取ル旅客ナリ

裕

公等ノ官銜姓名ヲ聞カン

大政類典

客

筆シノ曰職校理俞鎮學是乃新大在監司ノ息ナリ又ト校理ハ正校ニ品ナリ又陪後ノ一人アリ姓ハ鄭名ハ光臨廣州京畿ノ人ナリ

鎮學又問テ

公ノ官職姓名如何

裕吉シテ

職幹傳官姓浦瀨名裕

鎮學

側ナル小通事ニ向カセ幹傳官ノ職掌ヲ問フ

小通事曰

乃チ我國任官ト公幹ノ事ヲ談判スルノ人也

鎮學

任官トハ誰ヲ云ヤ

小通事曰

訓道別差ヲ稱ス

右筆ノ守門將ニ向ヒ今日入館ノ不許何ソ不礼ナル

ト叱咤ヲ極メテ之ヲ退去セシム

鎮學又問

公ノ今日爰ニ來ル果シテ何為ソヤ

裕

館外ヲ徜徉シ柵田ヲ見テ以テ客中ノ徒然ヲ慰ヒシ

カメシ長官ニ陪シテ茲ニ來ル長官ハ公等ノ此行ヲ

ルヲ聞テ斟酌シテ第ニ館ニ却ス

鎮學

長官ハ外務官員ナラン公ハ又何等ノ事ヲ主トシテ



渡海セシレシヤ

裕

長官ハ即チ外務ノ官員ナリ僕ハ韓語学ノ教授ヲ主  
トシ且壽阻商量ノ事ヲ兼兼ルセノナリ

鎮

公酒ヲ嗜ハカ

裕

最受訖セリ

鎮學即チ下文ニ命シテ酒肴ヲ出シ光龍トトモニ四  
酌二三巡

鄭光龍曰

公交隣ノ事一聞スト今果々何ヲカ為スヤ

裕

孤掌難鳴ト何レニ向テ共ニ謀ラシヤ貴國直突ナル  
訓導等ノシテ以テ之ヲ謀ラシムルリ將タ東萊釜山  
ノ兩使ノシテ之ヲ修議セシメハ豈時ニ隨テ同使ノ  
道トワラシヤ

光

於我モ亦何ソ隣交ノ絶ンコトヲ欲セシヤ

裕

常ニ兩國交通ノ間ニ云詞ノ如ク唇齒相依方歲不渝  
ニ及ホサント戊辰以降我誠意ヲ盡ストイハトモ敢  
テ應允セズ貴國ノ処分ニオケル甚タ野俗ナリト云  
マ可シ

鎮書示シテ

貴國天皇ノ姓如何

裕書レテ

我邦太祖以降皇統聯綿一系相承何姓之有而俗以奉  
天照神之故猶之姓崇祿耳

光

今此ノ隣交ヲ如何セハ可ナラン

裕

光龍カ弁ニ属シテ曰ク通事ヲ遣ケヨト光龍以テ鎮  
学ニ申ソ鎮守令シテ小通事三名ヲ退クシ後

裕

僕初ノ遊於此ニ來ルト云ハ小通事ノ間ノ忘ムカ故  
ナリ其美公等ニ面晤センカ為ノノミ抑我邦戊辰以  
來幕府ヲ廢シ封建ヲ改メ郡縣ト為シ 天皇万機ヲ  
親裁シモノ故ニ益兩國ノ交誼ヲ厚クセントノ意ヲ

表ニ懇々之ヲ貴國ニ告ク然ルニ貴國唯交際ノ例格

田ニ違ノノ以テ峻拒不應然レ共貴國ト交際ノ例

ヲ存センカ為ノニ今ノ政体ヲ曲テ以テ古制ニ甘從

スルノ理アラニヤ兵對馬州守ノ如キモ既ニ世襲ノ

官業ニ將命ノ職ヲ解トモ現官外務大臣ニ在テ

兩國ノ事ヲ管掌ス是ニ貴國ト隣誼ヲ尋リ盟ハント

誠意ニテラスヤ

然レハ我國ヨリ信使ヲ派スルニイタラハ纏成ヲ得

ヘキ今貴國ヨリ多半野情ノマ、依然トシテ置カレ

ハ如何

裕

信使ハ而前ノ事ナリ抑前々言ノ如ク可議ノ人無キ

大文類典

大文類典

ヲ如何分ヤ問絶ノ外ナシトイヘトモ実ニ累百年ノ  
隣交ヲ絶ニシトノ惜ミテ即今日ニ至レリ貴國豈善  
嗣ノ議スルノ人ナカラニヤ成成以還ノ本末モ亦一  
朝一夕ノ能ク盡ス所ニアラス希ハクハ公等節一就  
イラ從容ト之レヲ謀カラハイカシ

鎮

實ニ欲スル所ナリ然レモ現ニ今守門控ノ拒辱スル  
如斯

裕

某府ノ公文ノ勢へ来フハ何ノ拒詞カアラシ凡會合  
ノ事必ス和氣ニ依ラス其何ノ延ニテモ通告ヲ得ハ  
即ニ記テ可見也

鎮

再會ハ豫シノ期ニカタシ然レトモ若シ節一通告ス  
ルハ其レ何等ノ人ヲ用テセンヤ

裕

通軍金福珠ナルモノアリ宜シク以テ用ニ供ス可シ

鎮

諾然

裕

公多太浦ノ端路復逢ヲ此ニ取ラハ諸フ之ヲ告ケヨ  
草ヲ藉ス我カ持酒ヲ酌マシ然ラハ長官ノ出行ナヒ  
計フニノム不亦宜乎

鎮

存幕ノ行次ハ浮萍ノ如シ馬必ラス路ヲ此ニ取ル  
ヲ期ヒス遺恨マシ

大文類典

六  
正  
業  
興

光

方今在館ノ人数幾許ソヤ料米柴炭ハ如何

裕

現人数凡七八十口料食柴炭ハ皆本國ニ採テ用ニ是  
所謂貴國ヨリ水火不通ノ理ニアラス乎

光

由然リ

右畢テ各々名残ヲ各ミテ相別ニ申候尤相對申俗話  
多ク公事ニ裨益ナキ故畧之然ルニ彼ニ始終ノ語  
總テ隣交ノ成熟ヲ企望スルノ意充分ニシテ殊ニ鄭  
光龍ハ溫和朴實ノ風ノリノ其西間ノ廢絶ヲ恐ルハ  
、乘情辞色ニ溢レタリ憶ニ鎮守八年壯ニ未タシ固  
ヨリ治済ノ士トリ故ニ監司ノ鄭光龍ヲ付シテ以テ

事ニ參與セシムルモノナラシカト相考候

浦 瀬 裕

古谷豊次郎見聞書

一私儀 迺四月二十七日渡嶺仕候其比内外通商モ塞  
、候姿ニ候也新東萊府使交代ニ相成新東萊府使ノ  
意ハ對州ノ商人等我國ニ來リ商業ヲナス事ニ百年  
ニ述ニ然ルニ往昔ト變リ商人ノ交易モ衰ヘ隨テハ  
人負モ減シ今纔ニ存スル由館商ノ交易ヲ制スル時  
ハ彼等ノ活計ヲ失フ可シ可憫ノ至リ也仍テ郡中ヲ  
モ入館ニシノ夜市ノ禁スル番船ヲモ引ニムト云々  
一新東萊府使ヨリ通事崔在守ヘ令スル説ニ聞汝在  
守通事ノ職ヲ奉シ商法ヲトスト甚以不正ナリ罰典

大  
文  
類  
典

天保  
正  
類  
冊

ヲモ申付ル筈トカラ此節マテハ寛恕ヲ加ヘ不及沙  
汰向後賣買ヲナシニ於テハ嚴重ノ所置ノリト在守  
大ニ恐縮シ通事ノ勤メヲ辞セシトス東萊大ニ怒罵  
リ汝先非ヲ悔ヒ謹テ職ヲ奉スヘキニ尚職ヲ辞スナ  
トノ心得不墜ノイタリナリ職ヲ辞スルニ於テハ汝  
カ首ノ切ルト在守唯々トシテ承伏仕候  
一 本月廿日守門へ傳令ノ文ニ曾テ東萊ニ在ル所ノ  
布苜笠ヲ廢ストノ事取出シ有之是マテ東萊シタル  
故ハ右ヨモ廢スルノ意ニ相聞申候

一 適五月六日頃ヨリ守門ヨリ輸入品ヲ禁シ船橋ノ  
入口ニ番船ヲ置キ嚴ニ夜市ヲ制ス是カタメニ館商  
困窮ニ夜市ノ止ル度毎ニ仕入ノ錢滞滯シ仕入ヲ借  
タル韓人永キ番船ニ退屈シ或ハ博奕ヲナシ或ハ酒

色ニ貴シ終ニ資本ヲ失ヒ入館セ不致様成行候記テ  
ハ何故ニ外向如此イタスマヤ前ニ聞ク東萊府使ノ辱  
意ニ又對シタル件々ナレハ之ヲ在守ニ尋問仕候処  
在守曰ク新東萊ノ辱意ニテ館内ヲモ賑ヤシト館中  
ノ絶々ルモ入館ヲ許セシニ所豈國ノシヤ過日阿比  
留福次郎ヨリ某へ受取品モ一代官公ヨリ取反シノ  
命ノリト其次弟東萊府使へ訴出依処東萊府使曰ク  
館商等ノ買品ノ出入迄モ官人ノ指揮ニ候我我ヨリ  
入ル、所ハ許シ彼ヨリ出ス所ハ拒ム免角内外ノ商  
賣ハ忌ルハナルヘシ然ラハ嚴重番船ヲ付ク西川ヲ  
堅ク守ルヘシト云又曰與氏一代官ヲ勤ムル際ハ番  
船ヲ不引トト惡口ノ申分仕候事  
一 尊公様御渡海四五日前私仕所へ罷越候処在守云

大文類  
冊

近々森山公御渡海ノ由在候時ハ館内ノ形勢モ変リ  
可申ケ左ナキ時ハ我外向ノ模様モ変セス番船ハイ  
ツマテモ引アケスト申候素ヨリ館商一同御渡海ヲ  
渴望仕候処既ニ御館着相成時在レリト館商等相款  
ト頂日雇ヒノ韓人ヲ何ツモ四時五時ニ可返ヲ十二  
時ニ返シ一同集會仕候処在守ハ御着館イナヤ韓人  
不時ニ帰リ館商ノ衆會ハ是唯事ニアラヌ館中ニ車  
起リタルト事案ハ不知倉皇馬ニ鞭ヲ揚ケ東萊ヘ馳  
報セリト云々右ノ機會ニ乘シ去ル十九日用番ノ商  
人一同私館商總代ニテ住所ニ到リ崔在守ト面會我  
々共ヨリ申掛ケ候事件及異議候節ハ是マテ在守カ  
言行相違ノ慮ヲ責メ且ツ微々タル通事ノ身今ニテ  
館商等ヲ束縛スル件マヲモ論破候覚悟ニテ在守ヘ

先ツ商法ノ事ヨリ輸入品滞滞ノ事トモ申向候処平  
日ト変リ我々申掛候儀悉ク承諾仕候故他ノ論ハ不  
仕無事歸館仕翌二十日在守入館商路相通シ番船モ  
引ケ館商一同安心仕候  
一頃日東萊近隣ノ寺へ暗行御使七八人來ル其巨魁  
ノ人嚴シク前東萊府使ノ処置ヲ探索仕候由崔在守  
時々呼出サレ困却仕候ト云々然ルニ六月十三日私際  
門マテ罷出候処等變タル韓人三人對面仕候其中ニ  
承旨朴健休ト云人有之候何レモ微行ノ体ニテ朴氏  
ハ位三品ト書シ二人ハ官ハ侍杖六品ト書シ彼不郡  
來トテ筆談等仕候内何分田交ヲ勸ムルノ意味充  
分相見候尤田東萊訓導崔在守等ノ奸謀ヲ專ク探索  
ノ模様ニ候

一全二十三日大丘監司ノ息乘馬ニテ守門ニ入り和  
館ノ見物ヲセントス門將通事言ヲ盡シテ之ヲ拒ム  
同上激怒シテ遂ニ去リ外郭ニテ浦瀨裕ト對話ス其  
話中ノ事ノ守門ノ通事ヨリ承候ニハ浦瀨問從前兩  
國ノ通商自由ナリシカ近年一イタリ何故ニ斯ク貴  
國ヨリ相制セラル、ヤ大丘ノ人答フ云其事勿慮必  
歸本宜復旧ト又通事ノ語シニ左モ可有之ナリ此マ  
ハニテ過時ハ此近傍ノモノハ飢饉ニ死スル耳ト  
申候

一去令私渡韓ノ節朝鮮人ノ風説ニ北京ヨリ朝鮮京  
城ニ申來ルニ貴國ト日本ト八年久シク和好ノ國ナ  
リ然ルニ近年日本ノ使節貴國ニ來ルヲ跋畧ニ為シ  
散テ不按アリト、事アリト聞ク嘆ニ不可然貴國ノ不

敬ヨリ兩國拒絶ニ至ル時ハ必ス貴國ノ大事ヲ引出  
スヘシ相クマヘテ日本人ヲ粗畧ニスヘカラスト云  
々今東萊如此日本人ニ不敬ヲナス不久シテ職ノ免  
セラルヘシト韓人トモ申觸シ候然ルニ無程東萊  
屯職仕候亦近來一イタリ高官ノ人々館近傍ニ暗行  
仕候、ニテ專ラ館内ノ情態及ヒ東萊府使以下和館  
へ聞スルモノ、処置ヲ探索仕候  
右見聞ノ儘申上候 六月廿四日

一僕居京城姓李侍從朝奉郎守德敬曰昨出他未參今  
日相逢欣喜方々  
朴令適有身病有約未來使僕代行而人奉二兩重物雖不  
腆聊表惓然之懷





照管下則即今新差稱方謂何也巨魁一人姓名謂誰也  
 今行專為探問對館內不心之徒若知其姓名則告朝廷  
 必嚴繩爾斥矣願公許言之  
 三 慎勿頌人並我 邦人見之大不好矣必皆火焉  
 在守必又問今日華談矣切勿言之  
 人考則必收納 貴國使節書翰格例率  
 然改易此非東萊訓導之自下蔽塞即我 朝廷有拒絕  
 之命矣。今若書辭依前例為之八送使出來則依舊迎接  
 矣豈有使節空歸之理乎數百年修好之地不須先自  
 貴國有隙願公歸語館內管轄之官員書 格別率由固  
 章重修世好無使館商阻絕則豈非兩國之大幸歟偶然  
 相逢敢議兩國大事僕等之逢公豈非天幸耶  
 數百年約條炳如日月堅若金石書翰格例何為變易乎

一 遵古例然後始乃答和并  
 二 筆談稍久傍人多有疑懼且 罪禁嚴不可久留將  
 向他所笑三人之館內作聲事明言之家好此筆談紙即  
 於此席並為燒火何如若轉々掛他人一跟與大不幸也  
 探文之行帶謂之馬  
 賄行御史從人  
 李同善  
 別有偵探事秘  
 密命送館中勿  
 為便從宜當向  
 事



浦瀬裕向衣甲告ノ探聞書 森山茂記

一 新東萊府使ハ初ノ暗行御使トシテ萊府ノ民間ヘ  
 隠割セシコト凡三四十日ニイタリ前府使苛烈ノ地  
 ラ審ニ探察シテ彼ノ政府ニ訴告セシコト前府使  
 ニ代ラシノシ由  
 但シ苛烈ノ奉行トハ西洋木綿ヲ密商ヒシ等ノ人  
 ラ數多斬戮シテ並ニ城郭修繕ノ名トシテ計多ノ  
 錢財ノ民戸ヨリ集斂セシコトヲ云フト  
 一新府使ハ洋綿密商等ハ嚴制スルノ意ナリ却ノ之  
 ヲ縛セシ番兵ヲ杖罪ニ當シト云  
 一 兩國ノ交際ハ宗氏ノ周旋ニテ彼前ノ例格ナレハ  
 調整スヘキ旨ヲ唱ハ專ハラ宗氏ヲ慕ヒ復旧セン  
 ヲ企望スル也

一 訓導使卿ハ上京ノ命ヲ得既ニ上京ノ上免役セラ  
 レシ由

一 本邦ノ漂流民ニ於ケル撫恤從前ニ變スルコトナ  
 更ニ懇切ヲ加フル由況シヤコレヲ殺害セシ等ノ  
 トハ韓地ニ於テハ似タル説モコレトキヨシ

一 彼ノ朝廷近來支那ノ高麗館ヘ壯士二十名ヲ差出  
 シ郵使ノ法ヲ問ラキ本邦并西洋ノ軍大ヲ探聞シ且  
 ツ新聞紙等ヲ得ノ毎月四日間一度ツハ電報ヲナ  
 ス由故ハニヤ在韓ノ高氏等遂テ韓人ヨリ我邦ノ新  
 説ヲ聞クコト多キ由

石ハ草梁和館居込ノ商人等遊々掃州韓國賊民共ノ  
 説ノ由ノ以テ承及彼在突否ハ未詳候ハ共其備申上  
 候  
 七 年 六 月 二 日



朝鮮國黃泥御訊問ニ付所聞所見一々奉申上候尤此  
 内親達致シ難キ慮モ有之トイハトモ知テ不言ハ不  
 忠ノ義ニ原ツキ在ニ申上候條可然御取捨奉仰候  
 一外向大東華國政一新ハ道ノ官負不殘交遊ニ相成  
 昨年冬間ヨリ當春來マテ大ニ恙茫ヲ極ノ小吏ノ未  
 ヲ至危懼ノ形狀有之由

頑以為是ハハ道ノ官負ヲ引替候ヲ維新ノ政ヲ布ク  
 ノミニ無之彼ノ國近來自ラ悚懼スルヲレハ方一モ  
 皇朝赫怒彼ノ無礼ヲ御責被成下候時彼ノ謝スル  
 中間壅蔽成ハ事ノ未達ヲ以テ案ヲ施コシ隣証ヲ講  
 セントノリニモ可有之歟今般罷下候東萊府使ハ京  
 師ニテ家門弟二ノ登々ノ由以前ハ慶尚道安東ノ府

使ヲモ相勸居候由

一或曰公館郭外遊歩序状兵將ト對話ノ節伏兵將ノ  
 言ニ宗次使節ハ早晚頂出來ニ相成候哉ト相尋候ニ  
 付答ルニ唯不知ヲ以テシ何ノ咄モ不仕候所彼ノ平  
 人傍ヨリ唯獨言ヲ以テ使節出來ニ相成候ハハ無事  
 ニテ候ヘトモ若モ使節出來不相成トキハ心違ヒノ  
 イタリナリト相咄シ尚不開休ニテ罷在候処其後ハ  
 無言ニ相成候

頑以為此軍状兵卒ノ口頭ニ出候ノミナラヌ道路往  
 來ノ節不知韓人ニ對話ノ次使節ハ早晚渡館候哉ト  
 ト相尋候向有之ヲ以テ思惟仕候ハハ拳國隣邦ニ使  
 節能來ナキヲ憂ヘトスルハ顯然也

一諸將所ヨリ館路明信聽任官門ヲ押シ開テ庭前花

草見物ノ史守門通事尹鐸ト申ス若僕ノ跡ヲ追来リ  
叱シノ序彼レ曰ク如何シテ内外宜布様不相成候哉  
僕答如何ニ置キ処置セント欲ストモ中間ニ阻塞セ  
ラレ或ハ故常ヲ以テシテ時休ニ不涉朝鮮ノ奉止見  
ルニ不足云々ヲ以テスレハ彼ノ尹鐸微笑シテ去レ  
リ預以為此等ノ事陪通事ノ言ニ不出シテ守門通事  
ノ說話ニ出候者先内向ノ動靜ヲ窺察セサルヲ得ガ  
ルモ、ト見侍ナリ

一 旧冬都城火アリ凡十二日程ヲ焼ケ候由

預以為是ハ一時回祿ノミニアラス兩三年已前ヨリ

王家親戚ノ人トイヘトモ大院君ヲ憎ミ文武庶僚ト

謀策有之タル由ニ御坐候ヘハ事紛擾ニ乘シ機ニ投

ンタルトモ可有之候尤日數ト二日ト有之候ヘハ我

候ノ不得不容シカニ韓國ハ家々上壁ニテ御坐候ヘ  
ハ城中ノ人家彼無ノ方家ト稱候ニ付屋ニ属セ  
テ可有之候ハシカ

一 新釜山僉使到任後一度練兵有之午前十時ヨリ午

後四時過ぎテ砲声喧轟館中所知ニテ其後亦練兵ノ

噂有之候延相止候風聞ニ付探聞仕候延練兵ニ百姓

ヲ用ニ農事ノ妨ハ一形ノミナラス練兵ハ不入物ナ

リト僉使諭示ニ及ニタル由是マテ釜山近地ノ庶民

絶影鳥ニ於テ伐木等ハ決シテ不許若シ事ヲ犯ス時

ハ罪科ニ処セラレ候処當僉使ハ何分ニモ寛典ヲ敷

勤テ民ト共ニ休息スルノ仁政ヲ行ヒ候風聞ニ御坐

候ヘハ亦我々ニ接スルモ苛暴粗忽成ル候ハ有之間

敷方今外向ノ景況ヲ取視仕候ニ決シテ彼レ我ト交

リノ絶ノ意ハ無之唯盟約ヲ不誼マテノ事ニテ彼國ニモ世変リ時移リ候ニ付不年ニシテ懇熱イタスハ  
ノト奉存候事

一舊東萊府使上京ノ歸路次ニ於テ百姓共遮候風聞有之候

願以為是ハ常人任務中無事ノ者多人數殺戮ニ逢候ニ付自然ト其沙汰有之今程ハ忠清道ハ無恙歸郷イ  
タシ候由

一臺灣御進討ノ儀韓人等組相聞先般飛船渡館崔在守ハ入館イタシ不居候所其翌遽然トシテ上府イタ  
シタル取沙汰承ル

願以為是ハ館中ニテ常ニ臺灣征討アラハ列續キ征韓ノ事ニイタルヘシナド、自然ト物語流布任彼探

索聞知昨今也注意スル所ニ御坐候ハハ例ノ如ク崔在守訓導ヘ告知イタル事カト察シラレ候亦征韓論ニ付外務省御仲人ニテ御差押ヘ取成トノ儀在守等一イタリ承リ居候様子ニ候ハハ俊卿此事ヲ知リ候上ハ其他彼真等モ必ラス傳知イタシ居候事ト奉存候事

一昨年夏秋ノ際韓土周ノ馬牛傳染病ニテ尤斃牛ハ幾千方ヲ不知様子ニ付有識ノ君子又ハト人ヲシテ  
筮セシ、其言ニ曰

東西ニ掛ケテ二三年間ハ朝鮮兵禍ヲ蒙ルヘシ今般一度兵端ヲ蒙ハルトキハ朝鮮ハ亡國ナルヘシナド、是等ノ説ハ平生館中ニ不聞事ニ御坐候然昨冬頃ヨリ自然ト其説有之候ハハ奉聞此事ヲ掛念カトセ

察シラレ候東西ハ日本ヲ指シテノ事ノ由

一唐木綿ハ彼國制禁ノ品ニテ有之然ルニ當府使到任以來右ノ制ヲ解キ唐木綿一本ニ片韓錢百文ツ、ノ稅納定額ニ相納候由

頑以為是ハ如何ニ禁制ヲ布クトイハドモ下民ノ怨利割スルヲ不待カノ不逮ヲ誅リテノ一ニ有之候  
亦ハ洋貨國中ニ適滿ストイハトセ國ヲ富スノ良策ヲ謀ツテノ一ニ有之カ十年前ハ洋木綿彼ヨリ我ニ賣其後ニイタリ彼ニ我ニ求メ候様相成テヨリ以來公然賣買ハ禁止候處此節断然差許候ハ其見未タ相分リ不申候一夜高ニ通シ候韓人ノ說ニ大院君報權中常々日本人釜山城ヲ所望候ハハ可相與ト云々亦大院君夜分安眠モ不能トノ說有之ケル由

頑以為是ハ其通りノ一ニ有之小通事ノ輩ハ外關ヲ歸リ内突不相明候ハトモ夜高ノ者共ハ實利ヲ事トシテ日本人彼ノ國ニ永在アラシメテ相望候儀ニ候ハハ是等事ノ實ヲ以テ真情ヲ吐露シタルカトモ存候

一今度東萊府使下着ノ上任官ハ從前ノ如ク任所へ住居候様指令ノ加ヘタル疎聞有之候

頑以為是ハ府使訓導ヲ憎ミ候テ右等ノ指令ニ出候一ニ有之聞敷任官ノ職掌ヲ盡シシニ為メノ一ニテ可有之然ルニ其沙汰有リテ其実ナシ寥乎トシテ有名無実ト相成候ハ必定彼國賄賂公行賞罰私斷ノ弊トテノ不免殊ニ訓導俊卿ハ貨ヲ巨万ヲ累ホ候富人ニテ素ヨリ詐誅百生ノ惑人ニ御坐候ハハ大抵

此邊ノ以テ編造為致ニテ可有之由ナリ府使俊卿ノ  
術ニ階リ候事並有之早彼ノ朝廷ニヒ新人採用相成  
タル風聞ニ御坐候ヘハ所謂蓋虚不久ノ事ニ出事露  
顯ノ上ハ府使進退ハ素ヨリ任官任所住居ノ事ハ其  
通可相成奉存候事

一内外商路筋彼國ニヒ是ノテト違ヒ大ニ作興スル  
ノ景況ニテ節商等貧人勝ニ御坐候ヘハ其資本ハ彼  
レ却テ我ニ貸シ互市繁榮イタシ候方法ヲ行フトイ  
ヘドモ我ヲリ外國負債等ノ儀ハ一切不相成慮ノ以  
テ謝絶イタシ當坐ノ商法ニ魚キ居候ヘハ一時ニ果  
敢々々敷商路開ケ兼候ヘ共内尙、都合ニヨリ候ハ  
、彼レ我ニ應シ商法盛ニ行ハレ可申奉存候事  
一私儀昨冬十月渡歸本年五月所無仕候此間韓地ノ

解方ヲ熟考イタシ候ハ、彼國一新改革以前ハ粗暴  
酷烈ノ極ハノ我ノシテ輕蔑ノ情態相見居候此改革  
以來自然ト彼ノ人温和ニ相成随テハ我ニ接スルモ  
其姿ニ不得不成是レ一新改革ノアル所以ヨ

一本年二月頃ノ事ニヤ我國ノ漂民十八名朝鮮國海  
岸ニテ同國人ノタメ残殺セラレタリト云ヘル新聞  
アリ右等ノ事ハ矢張朝鮮國ニテヒ流談イタシ候ヤ  
且ツ右ニ付疑敷形情無之ヤ否御尋ニ付キ左ニ申上  
候

當ニ月十四日夜草津館前絶影島邊ニ於テ火藥粧載  
ノ船ニ般破裂沈没ニ及ヒ韓人十一名裂死イタシ内  
尸体三ツ海中ヨリ取揚候儀ハ親シク見聞ニ及ヒ候  
ヘドモ前條御尋ニ相成候日本漂民等殺伐ニ逢候ト

正業

ノ儀ハ彼國ニ於テハ更ニ不承ノ儀ニ存候尤本國人  
ハ昨冬薩人全羅道大靜縣ハ漂流一次ノミニテ彼レ  
殊ニ之ヲ款待イタシ候ル後我漂人ノ丁ハ甚モ承リ  
不申事ニ御坐候事

右ハ大畧申上候乞文言浮薄字句草々報計無限仕合  
ニ御坐候ハトモ草草ノ私聊愚慮ノ崖畧ヲ以テ申上  
候條宜御裁容杖下候様奉庶幾候以上 六月二日

嚴原支廳詰ノ上村貞則報申 森山茂宛

一從來宗氏貿易上ニ付米一万三千俵余外ニ兼帶米  
ト唱ハ二千俵送使米一千四百俵都合一万八千四百  
俵余米綿六百束程彼國於テ年々取立米俵由ノ処  
皇國復古以來貿易ヲ閉右品々蓄積致從來閑係ノ吏  
員ニテ預居俵由ノ処右預リノ者トモ追々私用ニ取

遣掛候史彼地去十二月以來國体改正ニ付取調石私  
曲ノ件々相類嚴重取立當時新任重職ノモノヨリ預  
リ候様ニ改正イタシ候由然ル処崔在守儀兼テ十方  
金程ノ身代ニ付右品ノ私ニタルハ非ス無テ都ノ  
方一手寄フル者ニ付數年蓄積フル古米綿等ノ譯ヲ  
以テ申立米綿一匹韓錢四百文俵米一俵八百文位ノ  
低價ニ買入タルヤニ相聞右品々一時捌方ノ夕ノ貸  
付候者ト相見外ニ子細ハ有之間敷見込ノ由

一彼國頑固ニシテ未開ニ付テハ自然日本ヨリ軍勢  
既無向々ニ進計在様成行候節ハ自身儀何レ忍軍  
々々居候儀ハ無之候ハトモ國民疑ヲ抱テ居候儀難  
計ニ付何分在國難致然ルニ軍勢ノ救差向上ハ境  
ノ守兵編成ノ出國難成ニ付若右様ノ節ハ前以一

文類



城西雜錄

自日本へ脱走イタシ度志願ノ趣在時依由

右二條ノ内初ノ條ハ豊武七想像ハル所ニテ條ハ在  
時直話ノ趣武七ヨリ聞取依此段不取敢拜告候事  
月五日

明年十月我廟議ノ停播スルハ春米鎮西ノ暴聚ノ  
事等依レ我兵ヲ勤カス景況ヲ先知セシカクメニ  
我賊商ニ依頼シテ例ノ後點ヲ呈スルノミ如是ハ  
對隣ノ間常ニ見ル所ノモノ也

公館守門之全文

傳令守門將

即列付 暗行御使秘閣内至於本府加沙里都賣亦足  
近年極始之序也其為獎勵果非尋常矣聞判却時所謂

即列付  
暗行御使  
秘閣内  
至於本府  
加沙里都  
賣亦足  
近年極始  
之序也  
其為獎勵  
果非尋常  
矣聞判却  
時所謂

之款  
之款  
之款  
之款

都賣特為革蕞是遣收稅之付於公用亦不可不念自本  
府從長區所後形止報于出道所宜當向事教是置蓋此  
都賣禁斷却前日朝令別歸者也其所奉行不敢少忽而  
所謂入給加沙里之款此都賣並緣公用之不得不爾許  
多為獎勵及於暗行親廉之下乃有此列般閱節則其所  
舉行不容玩愒都商賣名色自今永為革蕞無論某人隨  
力買取使之和賣為有矣化廳新定稅段既係公用今不  
可廢閣則每隻五錢或排定輸納是道以此令詳揭有礙  
上詳無被裁問不聞不知之款宜當向事

甲戌五月初七日

傳令守門將及通事等

兩門之設置門將通事書骨等直糾察出入是何等嚴密

城西雜錄

慎重而近聞浮浪狹雜之類假托 繡簾入往館中飾辭  
接語記言傳播聽聞可厭此若不別般處置則非但貽笑  
於隣國揆以邊禁方々寒心似此亂類今方別成譏誦示  
之以象警之典是在果真個繡行中人則万無此等之事  
而設仗真個 繡從名以就館要請入門即為報留於門  
所即々馳告以為待分付酌處之地是違以汝矣門將通  
事言之當此繡行器採之時不辨真贗權許出入為在其  
奉將令所違閱違本意乎如是令飾之後若或有此等入  
聞之事則汝矣門將通事難保首領除尋常場念舉行向  
事

甲戌五月十五日

頃日暗行密偵ノ員中大丘監司ノ男命鎮學等守門  
ニ未リテ館内ノ見物ヲ請フ守門將之ヲ非ム鎮學

怒テ遂ニ去ル守門將通事等敬礼尤辱シ然ルニ外  
向ニハ浮浪狹雜ノ黨徘徊スルカハ知ラテト曾テ  
此等ノモノ館ニ入りシトテ聞カス詔言ノ傳播セ  
レコトナク唯暗行御使即真個ノ繡簾ニ而暗又ハ  
筆話セシモノアルノミ是蓋シ其内紛ノ情區々館  
々傳延スルヲ怒ニ名ヲ之ニ藉リテ我ニ示セシモ  
ノナリ其故ハ此書ヲ揭示ヒシトテ態々謄寫シテ  
門將自ニ之ヲ獲ハ我寮ニ持來レ淺魯可笑

寓

茂

外務省六等出仕森山茂書翰 外務卿宛

本地ノ形行ハ追々好都合ノ旨上申候処宗大丞ニハ  
尚未タ出奈候運ヒニ不立至ヨシ軒兼イタシ焦苦此  
事ニ候因テ速ニ御評決相成候様重テ山之城祐長ヲ

大正  
陸軍省  
陸軍部

以代奏仕候実地ノ始末ハ親シク御査問被下度然ル  
ニ此上尚出資被 仰付カキキ御ニヨウニ候ヘハ不  
及是非小生下微力擔當仕何分カ順成ノ道ヲ計リ可  
甲候記テハ廣津弘信ヘ権限等御甲會早々渡韓候様  
紙仰月度奉存候小生見込ノ大要ハ此ニ先書申上置  
候ヘトハ猶丹呈候間御付紙ヲ以テ御指揮被成下山  
之城ニハ折返シ渡韓候様被 仰付度此段至急陳上  
候也 八月廿三日

各見込書

一 皇勅ノ文字ハ自國ノ尊号ナレハコレヲ稱スルト  
セ彼レ肯テ異難ナキヲ改是ヲ書中ニ認メテ可也併  
シ彼ヨリノ書中ニ此文字ヲ奉戴セサルトテ強テ誣  
迫スヘカラサル事

一 戊辰ノ初差渡セシ書契ハ未々本書ハ渡サハル事  
故先此マニテ黙止スヘキ事

一 先公務卿ト礼曹判書ト大丞ト参判ト平行ノ例ヲ  
以テ尋交ノ收ノ書通スヘキ事

一 壬申ノ春差渡セシ廢藩置縣ヲ告ルノ書ハ現ニ彼  
ノ政府ヘ寫シテ以テ通暢シ彼レ答フルニ議ヲ國中  
ニ收メテ決答スヘシト然レハ此書契ノ返翰ヲ出サ  
シムルヲ要スル事

一 右返翰ヲ受取上ハ之ヲ携ヘ帰京シ再度外務卿ヨ  
リ判書ヘ大丞ヨリ参判等ヘノ書ヲ携ヘ来ルヘキニ  
付款接スヘキノ約ヲナシ且其節判書ノ返翰ハ彼レ  
ヨリ聘使ヲ出シ我カ使員ト同々渡航スヘキ旨ヲ議  
スヘキ事

大正  
陸軍省  
陸軍部

大正  
正  
類  
雜

但シ彼ノ乞ノ所モノレハ預シノ定ノ難シ

一 圖書ハ素ヨリ受ルノ理ナケレハ自記ノ以テ往來  
シ封印モ亦兼テ離形ヲ取換ハセシ位ニテ向ヲ成ス  
ヘキ事

一 船隻ノ都合ハ外務省ニテ更ニ印記ヲ造リ旧前ノ  
又格ヲモ改メ宜ニ從カセ施行セシコトヲ約スヘキ  
事

一 歳遣貿易ハ原道有無ヲ通スルノ意ナレハ復レノ  
請フトコロアハ尚伺ヲ經テ決スヘキ事

右ノ以テ小局トナシ其他ノ小節目ニイタリテハ旧  
例宜キノ決スルモ國威ニ関セサル位ノ一ハ暫ク照  
視シ尚後日舒々改訂ノ期ヲ待ツヘキ事

森山茂書翰 外務卿宛

陳、尾間啓ニ儀七月廿二日京着ノコシ同二十七日  
竹廣津弘信内信相達シ追々御詮議ノ趣伴承抔善ニ  
不堪依此地動靜ハ其後兩三回上申候未小生ノ驚才  
素ヨリ克クイタス所ニアラサレト終ニ東萊府内禰  
將南孝源ヲ惹出シ候ヨリ彼弥疑問ヲ成リ候哉忽チ  
奸魁訓導安後卿ハ附科ヲ以テ都表ニ擡送セラレ陪  
通事崔在守ハ嚴シク程拮ヲ施シ獄舎ニアリ其他奸  
細ノ輩數名悉ク縛ニ就キ且兼テ密探ノ為權役イタ  
シ居候通事金福珠ナルモノ既ニ陪通事筆頭ニ登用  
セラレ内外トモ拂曉ノ有様ニ候殊ニ昨鶴ハ釜山愈  
々使ヨリ俄ニ薪炭等供進イタシ来リ則別紙ノ通答ハ  
置候間心ヲ是モ兩三日中ニハ定効ヲ表シ可申狀  
抑此時機ヲ致スヤ客年前外務卿支那政府ニテ三使

大  
文  
類  
集

談判ノ末同政府ヨリ朝鮮國ニ諭示ノ旨モ可有之尋  
テ同國ノ論一變且兩國交際ノ事モ改革セントスル  
ノ意ノルモ尚我ヲ疑フノ淺キニアラズ然ルニ於我  
ハ征蕃ノ一舉アリ而シテ我大勝ナル事等傳播交至  
リ彼一驚三嘆随テ小生渡韓彼探吏ヲ放テ我情ヲ偵  
索スルノ時宜ニ會シ我ヨリ、投策セム當ヲサルニ  
アラストイハトモ蓋シ人為ノ能ク及フ所ニアラス  
唯是自然ノ理勢ノミ然ルニ彼レ頗ル狼狽既ニ南孝  
源應接古ノ通り頻迫ノ情色自ラ面ニ溢レ我ヨリ説  
クヘキ、理ヲ却テ彼ヨリ講スルニイタリ殊ニ東萊  
府使ノ委代ノコトニテ即別紙福珠申立ノ如ク唯管  
小生ノ歸期ヲ緩ノムトノ意ニテ苟シクモ尋日講新  
ノ時ニ當リ輕輩フシテ無テ相心得置兵度ナト徒説

セシノ其所述然ラ陳奮一言以テ蔽之ヘキ事ノミ定  
ニ庶幾ノ極ノリト上ハ何分大丞下向ノ程跋望イタ  
シ若シ我ク在昔ノ氣勢ヲ闔フ時ハ彼レラテラス固  
執ニ決リ候ハ辭奴ノ常情決シテ等閑スヘカラサル  
揚言ニ御坐候方一夫丞于今滯京候儀トモニ候ハ、  
神速御評決祈上候最モ彼ノ意欲ヲ察スルニ 皇勅  
ノ文字ヲ恐ル、一甚シ是獨リ支那ニ對シテノ儀ノ  
ミニヒ有之間放若シ是ヲ奉スル時ハ即チ屬國ノ礼  
ヲ求ラサルヲ得セルトト元我カ對馬人中ヨリ誤シ  
后候モノラシト云ヒカタク殊ニ前府使訓導等ハ内  
政府ニ向ヒ詐偽百出終ニ七年ノ敵塞ニ涉リ候トナ  
レハ所謂先々主ト為ルノ類ニテ一朝殺塊ノ解カニ  
トスレハ多少威力ノ用ヒカルヘカラ人故ニ茲ニ於

ラモ納約自牖ヲ以テヨシトシ既ニ先年一端御廟次  
相成リシノトク先ツ外務卿ト礼曹判書ト等對ノ例  
ヲ收メテ彼ノ國使ヲ率ヒ歸ルカ我ヨリ之ヲ激スル  
カラ以テ一小局ノトシ漸次公明正火ノ場ニ移リ候  
方事忽テニ成リ功速ニ奉テシ致併韓奴ノ習躰沈深  
狡猾ヲ以テ大器量ノモノトイフシ居リ候ヘハ其初  
充分勝ヲ破リ置スシテハ後時ノ御法ヲ失スヘシ今  
ヤ僅クニ殺餌ニ就テ動キシカ如シトイヘトモ決テ  
サルーアラス我内部ニ威光ノ會有スルアルナレハ  
ナリ若此余竊ナクムハ豈如是ノ日アラムヤ今此報  
ヲ得ハ公然 皇ト玉トノ親交ヲ修メテ可也ト議ム  
ル人モアラムカ然レトモ廟堂ノ御括リ次第ニテハ  
如何様トモ御注文通り可相整勿論ノレト徒ニ筆鋒

舌戰ノミニテハ到底成業ノ見込無シ若シ夫斯然ノ  
決ナキトキハ寧ロ誠信敦篤ノ意ヲ以テ撫安シ開化  
ノ何モノタルヲモ概知セシノ舒ニ向上ノ一路ニ透  
導スル方益有テ損ナカルヘシ併シ廟議ノ在ル所ニ  
從事シ寛猛謀宜ハ唯命ノミニ何分宗大至下向ノ上ハ  
克ク利害ヲ講究シ成ルヘク公明正火ノ地位ヲ占ム  
ルハ勿論固ヨリ進ム有テ退クナシ克ク御威信ノ相  
立候様必死盡力ノ時ト存候前述ノ通り尚未カ公然  
實効ヲ不見ル後變常開鎖難計候ヘトモ先南考漁ヲ  
誘出セシ前使ヨリ應接ノ始末及訓導ノ體送在守ノ  
禁獄福珠ノ登用薪炭ノ供送等ヲ以テ見ル時ハ遂次  
好都合ト存候是以テ實地ノ形象ハ御遠察可成成下  
存候最早外務官前ノ而略モ唯々諾々ノ事ト被存候

九月廿一日  
正  
類  
典

且宗大丞渡韓フルモ最モ氣遣ニハ更ニ無之候小生  
儀昨今ノ時宜ニヨリ暫時滞韓其内大丞對馬へ下向  
可有之可成ハ其一儀ハ滞韓中ニ得クキモノト相考  
候必ス投機ノ氣モ可有之歟何分下向ノミ屈指相行  
居候此段別處船ヲ以テ及報申候也 八月廿一日

森山茂書翰 外務卿宛

陳ハ本也ノ形行ハ追々上中ノ末本月十六日後彼レ  
漸ク我ニ應スルノ勢ニ相見候久来中間ノ擁蔽セシ  
奸徒等悉ク捕縛セラレ同廿日終ニ釜山僉使ヨリ小  
生始々々へ依旧例着炭供送イタシ末即外務官員ヲ  
見認ノ候実切ト可申候且新訓導徳氏セ本月十七日  
發京大抵本月中ニハ到着可仕候ニ付小生ニ暫ク滞  
館致シ兵候様陪通事ノ分ヲ以テ府使ノ意ヲ通シ返

候此都合ニ候ハハ追々御威信貫徹ノ場ニ臨ミ候半  
カト小生見込ハ既ニ先書大畧上陳候通ニ御坐候然  
ル処本月三日詔廣洋弘信ヨリノ報ニヨレハ外登大  
丞ノ官銜ヲ表シ候テハ差問候トトノ議論差起リ干  
今不相決到底下向候見込無之趣申越於此議ハ既ニ  
小生發達前宗大丞トモ打合置候末ニテ殊ニ追々現  
情不並調音ヲセ申上候処猶再費イタシ候ハ抑實地  
一暗ノキ致カ甚以不可辦事ト存候最初伺候節ハ現  
官ヲ衣ムルト否ハ其場ノ時宜ニ隨カセ得ナレハ之  
ノ示シ得ナレハ之ヲ言ハス素ヨリ臨機應変ナレ  
ハ不待論今征蕃ノ事件ニ有之一時兩途ニ着手スレ  
ハ不宜ト儀ニ候ハ、國家多事ノ際ニアタリ不得  
止事ノカノ唯々區々小義ニ泥ミ酌量ヲ失シ候ハ、

大  
文  
類  
典

痛切ノ限ニ依抑朝鮮ノ事ヲクル弘信茂ノ下愚ト  
イハトモ直心擔當スルコト既ニ六年ノ間此事務一  
線ニ精カク盡シ居候儀ナレハ其下愚トイハトモ恐  
ラクハ上智ニ勝ル事ナシトハイヒカクラムカ然  
ルニ時ヲ相シ機ニ投シ往々見込ヲ上陳候テモ尚未  
タ其央ヲモ容ラレヌヤ如是順運適切ノ機ヲ報申ス  
ルモ尚且區々論議ノタノ一躊躇遷延スルハ為國家  
慨スル所ナリ此時ニ當リ既ニ支那トノ取引ニ候ハ  
ハ猶以速ニ從ヒ易キニ就キテ一小句ヲ成シ候ハ  
方々良策ト存シ候付テハ速ニ出發被 仰付對馬ニ  
下り候上或ハ航シ或ハ不航ハ時宜ノ処分ニ任セ可  
然乍去最早其端倪ヲ伺候上ハ夫ニモ及フマシキト  
御詮議ニ候ハハ廣洋弘信ハ文章功者ノ者御差添

早々渡陣可被 仰付依然フハ小生乍微力擔當仕何  
分々面目ヲ更ノ可申候然ルニ彼レノ狡獨ナル若シ  
我ノ寛優ナルノ間察スル時ハ又固執疾リ終ニ充分  
ノ運ヒニ至ラサルモ難計候ハトモ是亦不得止儀ニ  
存シ取河必死盡カノ秋ト存候速ニ御許決畧見込  
者ハ御指揮可被下候意情御間察是祈早々拜具 八月  
三日  
尚々訓導新任ノヒノニ本月中ニ下米イタシ候哉  
ニ付恐ラクハ来月中旬下テハ談判ヲハシメ候  
事狀ヲ推計イメシ候若談判相始メ候ハ、彼レモ  
頗々切迫ノ模様ニ候ハハ我ハ積重尤分勝運ノ  
道ニ誘入候積ニ存候  
三白病中多割別シテ乱筆御免可被下候

大政類集



九月廿一日

八月十五日通事金福殊ノルモノ内告ノ旨アリテ  
入来浦瀬裕面晤

福鬱、公等ニ所請ノ証書既ニ中房ノ朴氏ヲシテ府  
使道ニ呈納シ置キシニ去ル十三日料ラス使道ヨリ  
召致フ蒙リ即テ到シ、使道親謁セラレ而シテ内解  
將南五衛并ニ朴氏等侍坐シアリテ同前僕ヨリ呈入  
ノ證書ヲ披閱シ互相講究スル者ノ如シ稍有テ府使  
舎突テ曰汝リ所納ノ證書ヲ閱シ殆ニト滋味ヲ覺ツ  
故ニ特ニ南解將ヲ館中ニ遣ハシ韓傳官、シノ外務  
長官ニ而臨ニシノ其信証ヲ准駁ヒシコトヲ欲ス於  
入館シ彼人ノ閑優ヲ問ヒ無故ノ日ヲ定メテ稟告ス  
ハシ然ルニ即今機外ヨリ公納ノ米ヲ釜山ニ運漕ス  
故ニ南解將ヲ差シテ親檢入庫セシメカハルヲ得ス尤

其間六七日トレヘシ因テ本日ヨリ六七日ヲ経テ日  
次ヲ振フハシト僕答テ曰ク凡館人ノ風儀ニ於ケル  
若外客到ルノトアラハ方車ヲ始除シテ相接ス何ソ  
豫シノ日次ヲ期スルヲ用ヒシ府使再曰然トモ凡  
事最厚ヲ善ミム汝須シク入館以テ日限ヲ定ムヘシ  
ト僕恭諾談願ル乘情終ニ夜ノ徹シテ城門ヲ出ルコ  
トヲ得シリ且府使等ニ既ニ所請ノ証書ヲ得テ事情  
判明大イニ悦喜ノ色アリ是果シテ善事ノ端ナラシ  
記テハ二十二日田曆十二日ノ後チ幾日ヲ以テ約セ  
ンワ  
汝ヲ答解ニシ和ク館中ニ於テ決シテ有故ノ日ナ  
シ然ノトモ長官ノ憂解既ニ迫マレリ嗚呼解將ヲシ  
テ長官ニ而臨ニシメカハル遺憾ニ々ハス魚クハ公米

大文類

檢受ヲ後ニシ僅ニ一日ノ間シテ入館ヲ十廿ハ彼此  
多幸トラン

福僕モ亦思ハサルニアラス然レトモ公米運輸ノ法  
現アリ奈何トミスヘウラス

福我レ公事ヲ設スルニ當リ有故ノ日ナシ故ニ汝ヲ  
速ニ上府シテ御將ニ見ヘ其入館スヘキノ日ヲ堅約  
シ印信ノ受ケ来ルヘシ

福諾然

右ニテ畢リ明曉東萊ヲ出糞スルノ約ナリ然ルニ翌  
十六日遽然トシテ来口

福本晚家人守門ニ使シテ云嫡子粹ニ霍乱ヲ發シ病  
勢甚々重シト故ニ門將ニ請テ倉皇御宅入堂前ラシ  
テ病者ハ見ス南屏將ノ童子家丁等ヲ具シテ安坐ス

ルヲ見ルノミ御將日向ニ汝ヲ所告館中長官ノ岩期  
切迫スト故ニ府使ノ指令ニ公米檢受ノ日ヲ繰ラシ

夜陰ニ乘シテ下往シ清宸館ニ就テ素志ヲ遂クヘシ  
ト即テ命ヲ奉シテ此ニ到ル汝ヲ神速入館シ以テ此

意ノ通告スヘシ而シテ予誓ラク言ヲ遊覽ノ風容ニ  
託カシ故ニ笠衣共無官形容ヲ造リ童子家丁等ハ守

門ニ留メ以テ單身入館スヘシ汝モ亦此意ヲ体シ嘆  
ヲ以テ告ルフト勿レト右述ル所ノ如シ公等唯ク迎

接セラルヘシ

暫時アツテ金箱珠一風容ヲ引テ浦源裕ノ寓ニ到ル  
住永辰安ト共ニ之ヲ迎接各坐ニ付テ初面ノ話畢テ

姓名住居来臨ノ情ヲ問フ  
答曰姓南名孝源忠清道忠州ノ者ニシテ故アツテ六

大正類聚

湖前近地ニ未今便ノ符ノ貴館一覽ノ素望ヲ遂ク何  
ノ幸カ之ニ如クシ

格本館ニ往年ハ稍見ルハキセノアリシニ近年ニ至  
リ西情阻隔随テ館中ニ六數敗ス何ソ貴客ノ親覽ニ  
充ニヤ

南今開ク兩國阻隔ノ情ニ於ケル最歎スハキセノ也  
予固ヨリ一時遊覽ノ徒トイハトセ憂國ノ情ニ於テ  
豈職掌ノ有無ニ関センヤ憂國ノ情ヲ以テ公

事ヲ聞ク蓋シ人氏上ノ通義ニシテ政府ニ背テ憲責  
スヘカラサル者也翼ソハ細陳セヨ  
格不知成敗以俾ノ願未ヲ聞カシコトヲ欲スルヤ否  
ヤ

南國ニ開カシコトヲ欲ス然レトモ予之ヲ聽テ以テ

漸心スルノ權トシ故ニ公等敢テ強迫ヲ用ヒス舒々  
事理ヲ講明セハ幸甚々々

然ラハ大綱ノ弁テ記叙スヘシ抑モ我國上 天皇ノ  
在マスアリ下ニ幕府ノ在レアリシハ是貴國ノ自ラ  
明知スル所ナリ公ニ亦疑ヲ容レサルヲ知ル而シテ

古ハ太政悉ク 皇室ニ出テ中世之ヲ將家ニ委シ外  
國交際モ亦之ヲ總掌ヒシム貴族兩國交際ノ如キ則  
チ足利豊臣徳川ノ三氏相繼テ之ニ任ス然ルニ世後

リ時変リ泰平ノ久シク弊害ナクニテアラス故ニ國人  
舉テ古ニ復センコトヲ庶幾ス於茲時勢ノ然ラシム  
ル処ヲ酌量シ終ニ戊辰ノ改革アリ是ニ蓋シ 皇政

維新ノ原由ナリ夫我邦ト貴國ノ至接ナル僅ニ一葉  
ノミ唇齒相保チ患難相救フノ誼ナカレ可カラス即

大正類聚

古未金石ノ交誼アル所以ナリ今ヤ幕府ヲ廢シ皇  
 上乃機ヲ親裁シ玉フニ當ツテ旧交益敦ク新盟愈堅  
 カラニノリヲ欲スルカ故ニ前ノ對馬州守ニ勅  
 シテ其旨ヲ貴國ニ通告ス是戊辰ノ冬ニ関ケル而シ  
 テ貴國共皇勅ノ文字旧格ニ違フト謂テ其書ノ撰  
 シ百方弄竊茲ニ三年ノ關ス於我共皇字ヲ載スル  
 モノハ國狀改革ノ實ヲ陳述スルニ係リ且事件各物  
 ノ如キ不可書ノ字トク不可書ノ事ナシ若シ其レ之  
 ヲ嫌忌シ將タ何ヲ以テ事ノ実ヲ告ゲン今試ミニ之  
 ヲ言貴國若シ宗親ノ中ヨリ新ニ大王ノ位ニ即ク人  
 アリ是ヲ外國ニ報スルニ當リ王字ヲ除去シテ以テ  
 其狀ヲ告ケルノ術アルヲ決シテ不能也而シテ其  
 復書中皇字ヲ恭載スルト否トハ貴國ノ所見アル

ヘシ我輩之ヲ強迫センヤ然レバ礼信ノ所係自カラ  
 古今ノ公行ニ從フアルニ而シテ貴國毫モ理情ニ  
 不涉唯々旧例ニ復センコトヲ強持シ若シ否ラスニ  
 ハ乃百年ノ久シキヲ經過スト茲決シテ許應セス  
 ト其同陋ナレ豈隣國ノ強誣スルノ理ニアラスヤ凡  
 友國礼ヲ以テ所送ノ書ヲラハ礼ヲ以テ之ヲ受ケ固  
 ヲリ然リ而シテ其事ノ可否如何ヲ論スルニイタク  
 テハ惟其自國ノ見識ニ在ルノミ公如之何  
 南子曾テ之ヲ都城ニ聞クコト無キニアラス然レバ  
 今公ノ議論スル所ト甚タ差違アルヲ怪ニム予カ所  
 聞ノ如クハ貴國其緣由無クシテ突然裁ヲシテ皇  
 勅ヲ奉セシメントコトヲ強迫スト故ニ於我貴國ノ舉  
 行甚々不良ナリトス然ルニ現聞ク所ノ如ク其復古

ノ縁由確明ナレバ何ヲ以テ不良トセシヤ夫各國々主ノ尊稱アリ其臣民ニシテ其尊稱ヲ表スルコト理体何ヲ妨ケン今若シ甲國乙國ニ通告セザルヲ得ザルノ縁由アリテ其是ヲ表スル乙國豈全ク忌作スルノ理アラシヤ然レバ其乙國ニ於テ酬ムルニ奉稱シ難キノ所以アラハ甲國モ亦之ニ從ハサルノ得ザルノ事今聞貴國其尊稱ノ表セザルヲ得ザルノ縁由アリテ之ヲ表スルニ強迫スルモノニアラス而シテ復書中擧載スルト否ハ自ラ我カ所見ニ任スト是モ亦適當ナリ

裕却テ記ク幕府ヲ廢シ太政官ノ置キ藩ヲ廢シ縣ヲ立テ郡縣ノ制茲ニナレ外國交際ノ如キハ外務省ヲ以テ之ヲ掌ス而シテ對馬州守ノ如キモ其官ヲ解キ

其職ヲ罷ムルトイハトモ貴國ト旧交ノ素ノルニ由テ特恩外務大丞ニ任セラレ復更ニ使書差シテ尋交ヲ商議シントトテ告テ其所擧ノ書契 皇勅ノ文字ナシ是蓋シ至申、春ニ係ルテ當カ一思ハノク果シテ變通ノ如ハニ者ノ如シト於茲我朝ノ盛意ヲ述ルコト數句數月然リト強トモ尚峻非不應且云我國ハ對馬島人ヲ知ルルニ敢テ外務ノ官負ナル者ヲ不知不知者ハ相面スルノ理ナシト現ニ大丞ノ信簡ノ間ニ其事由ヲ了悉スルモ尚且如此其他無狀ノ言駭蔑ノ行狀奉ニ違フラス然レトモ於我陸忍誠然ナル事茲ニ七年間ニテ嘗テ貴國ノ不遜ヲ鳴ラシ大イニ根論スルモ、ナキニアラス方今我國ノ形勢ニ於ケル貴國人ノ皆所概知也公モ亦必ラス之ヲ察セシ予

姓ヲ對州ニ稟シ本務ニ從事スル一三十有余年而シ  
 テ戊辰以來ノ事実ニ貴國ノ失着ト云フヘシ予竊カ  
 ニ貴國ノ為ニ慨歎スル所ナリ且聞ク奸猾ノ徒ノツ  
 テ揚言シテ云外務官員ハ是日本人ニアラスト終ニ  
 水火不通ノ舉ニイタル凡此等ノ事為貴國訐、督ハ  
 シト欲スルモ敢テ可入ノ膽ナシ豈痛切ヒサラニヤ  
 南 予生ヨ忠州ニ稟ト虽トモ京城ニ奉仕スル久シ且  
 兩國ノ事順ル間ヲ得タリ而シ今公ノ懇談一々諒悉  
 及省ノ感ナキニアラム予一時遊覽ノ役ニシテ交際  
 ノ職ニアラスト虽トモ豈之ヲ憂歎セザラシヤ凡國  
 事ニ於ケル其之ヲ取舍決定スルノ難ナキモ寧ロ口舌  
 之ノ間ト口之ヲ談スヘカラザルノ理アラシヤ諸フ  
 幸ニ通常風流ノ行容ヲ以テ目トス宜シク講明アル

ヘシ予モ亦敢フヘキモノハ反重質ヤニ一ヲ欲ス茲  
 ニ重テ問フ前ノ對馬州守現ニ外務大丞ニ任セラレ  
 タレハ我ヨリ酬ムルノ書簡モ外務大丞宗重正公ヲ  
 以テ携載セハ可當ナラシカ  
 裕 辛未ノ年大丞ノリ差ス所ノ書式ヲ以テ見ル時ハ  
 果シテ公ノ示意、如クシテ可ナラシ  
 南 前ニ陳ズレ如ク 皇字ハ即チ貴國ノ臣民ノ自カ  
 ラ尊稱スル所ニシテ固ヨリ聞然ナシ而シテ我ヨリ  
 酬ノ書中之ヲ奉載スルト否ハ我カ所見ニ任シ政テ  
 強迫トカラシム  
 裕 貴國の輪ノ如キ 大皇ガ機親裁シ玉ノノ本義ヲ  
 受ケ瞭然其旨ノ書中ニ掲クル時ハ文字ノ有無ノ以  
 テ之ヲ強論スルノ理ナカラシ

南 事理煩ル服膺セリ茲ニ開外務官員ニ水火ヲ通セ  
スト是蓋シ事ノ輕キニアラヌ抑貴節ニ薪炭ノ供進  
問絶スル將々幾下ナルヤ

裕 壬申ノ秋以來既ニ三年ニ及フ

南 昨年来貴館ヨリ米穀ノ入給ヲ乞ハレシトアリヤ

裕 壬申年旧代官等退去以來一粒トイハトセ請求ヒ

シトナシ米穀薪炭共ニ悉ク本邦ヨリ漕運セリ

南 獨語シテ云中問ノ壅塞ス亦甚シ

然ラハ旧代官所ノ存在中若シ精米貸用ヲナムト

アラハ必ラス貴方ヨリ備用ノ證書ヲ遣ハセシヤ

裕 果シテ然リ手標ト唱シ代官所公印ノ捺押シテ入

送ヲ請フ是レ例ナリ

南 然ラハ壬申以前ノ事跡ハ自ラカテ公鑿ノ道ナリ而

シテ歲遣船ハ送ノ為ニ於我精米ヲ儲蓄シ今尚倉庫

ニアリ當初歲遣船ノ中止セシ緣由ハ如何

裕 既ニ述ル所ノ如ク前對馬州府外務大丞ニ現任セ

ラル、事ヲ告ケルニアタリ貴國書契ノ格例旧ニ違

フヲ以テ詰難ヲ持張ス焉ノ歲遣船ヲ差スノ道アラ

シヤ今ノ尋交成局ノ地ニ帰スルニ至ラハ兩邦聘問

ノ使价并有無相通スルノ訂約無クニハ有ルハカラ

ス

南 予聞當初函書ノ舉論ノリシト今後我國鑄造ノ圖

書ハ決然用ニサルモノナランカ

裕 凡外交ヲ管スルノ職各銀銅ノ印記アリ大丞ノ如

キモ亦既ニ銀印ヲ賜フ即官衙ト姓名ノミヲ記シ更

ニ恠シムヘキモノニアラス

類聚

南賜印、典我邦モ亦然リ而シテ往昔我々圖書ヲ送  
ルモノハ我ニ信ヲ取ルノ意ナリ今我ヨリ現官姓名  
ヲ以テ鑄造セハ如何

裕 既ニ 天皇所賜ノ銀印アリ何其他ノ印ヲ用ヒム  
蓋シ往來船隻動合ノ印記ノ如キハ則チ謀議副官以  
テ万世ニ垂ルヘシ吾輩三十年間本館ニ往來シ願ル

兩國ノ規格ニ通ス而シテ前東萊府使漫ニ最令ノ出  
シテ貨物ノ出入ヲ禁シ内外商民怨困ヲ極ム且館直  
ナルモノハ素芝本館ノ掃除ニ供ス而シテ叢草一莖

ヲ拔カス是何等ノ所以ソヤ  
南 都中商譯入館ハ既ニ解許ス惟フニ惡漢アリテ此  
弊害ヲ醸成スルトラン 館人其レ難レヲカ指スヤ  
裕 是等ハ予輩ノ得テ言スルヲ俟タス内外ノ人民ニ

問ハ、忽チ明了セン凡既館ノ客館司ノ亭ニ登遊セ

スニハ襟襟ノ披ク一返ラス且外務官員ノ在マシア  
リ公登行セハ如何

南 予既ニ志有り若シ長官ノ面晤ヲ許サハ欽幸曷ソ  
已マン公等ハ即チ主人ナリ冀クハ周旋アラシコト  
ヲ

右半テ浦瀬位永同行館司亭ニ来ル少時アツテ森山  
茂出坐互ニ姓名ヲ通ス

南 不苗尊公ノ拜晤ヲ得テ欽幸ニ不堪也

茂 予歸期近キニヨリ旅情無慰ノ際貴客入来ス心固  
知已ニ會ムル如シ望ラクハ其官衙ヲ聞カニ

南 僕ハ山水ヲ遊賞スル学エナリ何ノ官名カコレ有  
ラン然ルニ向時幹傳官ヨリ兩國間絶ノ願未ヲ聞知

大文類聚



シ類リニ感慨ノ懷アリ僕一箇ノ風容ト虽且憂國ノ  
志ナキニアラス故ニ之ヲ聞カニコトヲ欲スルモ亦  
必ラス施ス所ナキヲ保タス莫クハ尊公僕カ微情ヲ  
洞察シ兩國ノ事ヲ以テ重ト為確論明辨ヲ賜ヘ  
茂足下ノ言詞頗ル至切予甚之ヲ感ス足下ハ果シテ  
有職ノ人ナラン苟クモ之ヲ包藏スルハ予ノ得テ悅  
ハサル所ナリ望ラクハ快然之ヲ告ケ以テ懇議セハ  
可ナラン

南 尊公ノ明鑑當ノトレニ非ス然レトモ尚未タ公然  
通暢スハウカフサレノ情ナリ故ニ官服ヲ脱シ賤衣ヲ  
著シ一風客ヲ以テ任テ尊公ノ拜晤ヲ請フ冀クハ之  
ノ諒シ深ク答ハルワレ而シテ僕之ヲ切ニ聞カニコ  
トヲ欲スルモノハ煩ラク言ハント欲スレハナリ其

言ハント欲スルハ兩國歡好ヲ計ラント欲スル所以  
ナリ

茂 貴意既ニ諒ス何ソ深ク問ノ為甘ん予ノ所陳述潜  
心聴取シ若シ或ハ其可疑ヒノアラハ又復討論以テ  
面従腹非ノ弊ナカラントヲ要ス

南 不意了悉向ニ幹傳官ノ言ニ就ノ考ノルニ戊辰年  
來貴邦盛意ノアル所更ニ我朝廷ニ稟徹セナルモノ  
、如シ惟ニ僅カニ兩ニ輩ヲシテ交隣ノ大事ヲ委  
スルノ弊ナラニキ 幹傳官ノ懇話ニヨリ頗ル發勝ス  
ルコトアリ然リト虽且尚尊公ノ確辯ヲ得ハ強決心  
以テ盡サント欲スルナキニアラス茲ニ戊辰以降兩  
國往復ノ書ヲハ請フ一覽ヲ許セ

茲茲予茲ヲ編輯スル所ノ通交摘要一部ヲ戊辰辛未

大正  
九年  
五月  
二十  
日

ノ前後ヲ以テ二冊ニ分テ相投ス但シ彼レ毎一皇  
 勅ノ文字ニ拘泥セルカ故ニ戊辰往復ヲ既往トシ辛  
 未已後ヲ以テ現今ノ主要タリト云フカ如ク意ヲ誤  
 專ニ疑懼ヲ破ラント欲スルノ即策ノミ  
 茂此二部ハ即戊辰年来今ニ至ル往復書ノ摘要ナリ  
 是下昔ヲ既往ニ拘泥トス現今ノ主務ヲ詮釋スヘシ  
 然ラハ先戊辰ノ部ヲ後ニシ辛未ノ部ニ同テ之ヲ究  
 ムハシ予モ亦不咎既往未時ノ如何ヲ詳明ス可シ茲  
 ニ我邦維新以來官職制度ノ一書アリ即チ職官表ト  
 題ス是ニ其其変革ノ状ヲ併見スルニ是ラシ  
 於茲幸源戊辰辛未ノ兩部ヲ流覽且職官表ヲ熟視シ  
 頗ル疑懼氷解ノ色ヲ含ミ欽然トヒテ曰  
 南予職官表ヲ見ルハ今ヲ以テ初ノトス然レハ貴邦

維新以還百制改革ノ事ノ如キ固ヨリ概知スル所豈  
 疑ヲ容レニヤ且通交摘要ノ書ニ亦常テ閱セサルニ  
 アラス而シテ其間スル処ト一差違フルナリ貴邦ノ  
 舉行ニナケル内徳ストク外欺クトキヲ知ル我邦徒  
 ラニ旧約ヲ墨守シ其趣ニ罷ノラル、所ノ州序ニア  
 フスニハ往復ノ計サスト是固ヨリ法外ノ説ト云フ  
 ヘシ乃口情好ノ相貫セサルヨリ起ル所ニアラスニ  
 ハ豈如是ノ理アラシヤ然ルニ 皇勅ノ文字ニオテ  
 ル貴國必ラ人之ヲ我ニ奉セシメシコトヲ強迫スト  
 雖ニ幹侍官ノ懇説ヲ得テ漸ク解ムル所トイハレ尚  
 尊公ノ確辨ヲ請フ抑此事ヤ於我不可言ノ難狀アリ  
 今更ニ贅ヒス乞之ノ諒セヨ  
 茂我、稱皇勅勅方國國ヨリ推認スル所ナリ而シテ



貴國不可言ノ難状アリト我ニ未タ其所以ヲ知ラス  
 ト或モ兩情相諧フ所ニ從テ以テ法ヲ制シ約ヲ立ツ  
 豈強迫スルノ理トシヤ抑貴國ト我邦トノ如キ僅  
 タタル接壤トイハトモ其風俗ノ異ナル人心ニ亦不  
 同故ニ貴國今日疑フヒノ明日沛然トシテ信スルニ  
 至ル是蓋シ自然ノ進歩ニノラスンハ敢テ得ヘカ  
 ス必ラス疑團氷釋ノ日アルヘシ下畧  
 於茲而國古今從來ノ變移ニ始マリ戊辰己未我邦盛  
 意ノ所在及ヒ方今万国ノ形勢ヲモ併セ觀シ鄭重陳  
 辨スル一大概浦瀨ノ所説ニ似タリ彼頗ル解スルモ  
 ノアルカ如シ  
 南 確辨ヲ得テ定ニ安着セリ貴國稱皇稱初固ヨリ其  
 分ノミ豈天下異辭ヲ四ソルモノアラシヤ予既ニ既

往ノ顛末ヲ問知シ敢テ疑フヘキモノナシ惟フニ過  
 去ヲ并置シ將來ヲ議シテ以テ敬好ノ道ヲ盡スニ如  
 カシヤ茲ニ問フ貴邦外務省ヲ置テ外交ヲ関シ前ノ  
 州守モ亦外務大丞ニノツテ專盟ノ事ヲ理ス理体當  
 然ナル時ハ今外務大丞ト我禮曹參判參議ト匹適ノ  
 酬書ヲ以テ旧交ヲ修ノハ如何  
 外務大丞ハ本省中一ケノ官吏ニシテ其外交ヲ總  
 掌スルニハ即チ卿ノリ輔アリ  
 南 固ヨリ上ニ卿輔ノ在ルヲ知ル我國禮曹ト魚トモ  
 判書ノ以テ長官トシ次ニ參判參議アリ且自余ノ官  
 負ニ亦彼此平行ノ礼無クシハアルヘケラス喻ハ尊  
 公ノ如キ我禮曹ノ左右郎ニ對シテ可ナラシク故ニ  
 其交際ヲ掌ルノ主ナルモノハ外務卿ト禮曹判書ト



類聚

ヲ以テセハ如何

茂然リ而シテ我外務卿ハ一等ノ官ナリ因テ若シ礼曹判書ノ闕負アラハ議政ノ官ニ對セラル可カラズ足下ノ事理ヲ解ハルノト恰モ淡雪ノ日ニ向フク如シ貴國足下ノ如キ人アツテ尚久来ノ間絶ヲ黙視ス予ノ不解所ナリ

南前ニ言一如何我朝廷既ニ貴國盛意ノ所在ヲ通悉スル時ハ豈遠人ヲ煩ハスノ理アラシヤ必ラス不遠尊公ノ疑固ヲ解クノ日アルヘシ茲ニ一依頼アリ今傳公ノ高論スル所貴邦外務省ト我礼曹ノ両大臣ヲ以テ等對トシ前ノ州守モ亦外務大臣ニ在テ礼曹ニ敵ノ官ヲ以テ平行ノ例ヲ修メハ理体當然云々ノ旨ヲ書記シ以テ僕ニ下給ノヲハ僕將ニ施ヤントスル

所ナリ如何

茂足下既ニ事理ヲ解シ尚且書給ヲ乞フ予甚ク解セサル所ナリ其政如何トナレハ既ニ壬申ノ春差使所齋ノ書契ノ寫シハ即チ貴國ノ政府ニアリ今ヤ貴國疑團漸ク解ケ旧交ヲ収メント欲セハ宜シク回翰ヲ報スハシ而シテ東萊釜山ノ兩公ト面晤永遠歎好ノ地位ヲ定ム

南其書契ノ如キハ尚未タ奉書ヲ捧出スルヒノ一アラス僅ニ寫シテ以テ之レヲ知ルノミ故ニ我國公然受納セシモノト云々可ナス

茂次ニ不然凡兩國書契ノ受送ニオケル任官下先其書ノ閑綴ニ寫書ヲ以テ之ノ貴政府ニ稟答シ例日ヲ終テ回翰ヲ携来リ以テ兩書ヲ交換ス自ラ是恰

大文類聚

類聚

例ナリ殊ニ貴國政府旧議ヲ國中ニ取ラテ後決答ス  
ヘシト貴國ノ各辭如此トキハ則尋交商量中ニシテ  
予等再ニ來往スルニ早晩其田翰ヲ待ノ意ナリ是  
ル、ヲ得ンヤ

南 僕突ハ廟堂ニ在テ此寫書ヲ一覽セシコトアリ然  
レトセハ後數年ノ掩滞ニ涉リ今漸ク事理諒悉セリ  
ト謂テ以テ田翰ヲ整へ来ルルカ如キ寧ロ情勢ノ爲シ  
得難キモノナリ乞フ之ヲ察セ、僕專公ノ書給テ欲  
スルハ其端倪ヲ問カントノ意ニシテ回コリ約條ノ  
証書ヲ給ヘト云フニアラス唯筆話ニ答及、如ク書  
給テコソナラフ希フ耳

予苟モ尋定滿議ノ未職ニアリ其言ト書ト何ソ異  
ナレゾランヤ予固リ書給テ難ニスルニアラス我

白ラ一定ノ將論アリ故ニ貴國ヨリ之ヲ請及スルノ  
意ヲ以テ内朝廷ニ向ニ盡力周旋ヲ為ス崇職トシテ  
奮勵セシランヤ思フニ足下現ニ官衙ヲ表シ更ニ議  
到セハ予ヲ推選ノ所及同心協力以テ順成ノ道ヲ圖  
ラシ

南 僕ノ官衙ヲ表セル實ニ有故也公ノ所言モ亦理  
ナキニアラス是已ムヲ得ル所也更ニ新念ムヘシ  
於茲彼ニ范乎失望ノ色アリ故論將ニ中止セントス  
故ニ予書示シ

夫次足下之請求也事理諒然予固嘉納焉然對一時遊  
來之風容書給公幹之要區是果有欠於予職掌者及足  
下治現表官衙從容議到則酌量理情深望周旋於予之  
所任胡為月報辭予負荷本務六閱年從而尚未能通徹

大文類聚

本邦盛意之所在今也歸期頻迫抑如此情何嗚呼足下  
為謀最善々々然若儂々失時則恐有日昏路遠之歎乎  
足下既曰非曾不既知本邦之情勢也惟其深察焉凡方  
公幹之要領乃事無大小以幹傳官之舌頭以為信據莫  
敢容疑幸甚

於茲幸源再三無讀喜奮交生ノ情色アリ直ニ採筆  
既知公之意向則更不必多陳以此深諒如何

右書ッ予ノ前ニ投シテ

南 貴公ノ篤志實ニ感銘セリ僕固リ貴邦ノ進情ヲ聞  
知ヒサレニアニス 而シテ尊公今此現情ヲ以テ回奏  
ノ地ニ至ル苦悶ノ情深察セサランヤ僕苟モ區々ト  
シテ止ムヘキニアラス不日上京ノ時アリ恐ラクハ  
可為ノ道アリラントス既ニ書示セラレ、如ク事大小

ト無ク幹傳官ノ舌頭ヲ以テ信據トセヨト是即確志  
ト云フハシ何シソ更ニ書給ヲ欲セニヤ願フニ此片  
紙ノ請フヲ以テ僕カ言説ノ信ヲ益サントス冀クハ  
之ヲ給ヘ

後 足下ノ胸霧既ニ散シ予モ亦拚敢セリ其片紙ノ如  
キ豈請ニ從カハサランヤ

於茲談論勢ヲ得互相欽快ヲ催ス其間消瀬等ヨリ從  
來東萊府使我ヲ侮辱スルノ傳令書及漂民ヲ送還セ  
シニ却テ我カ誠意ニ及シ不遜ノ語ヲ逞セシ等ノ事  
ヲ陸續論及彼レ益前府使訓導及ヒ崔在守ノ奸猾ヲ  
息ミ大イニ恥ルノ色アリ

南 所問於我皆條理ヲ失セリ蓋シ既往ノナリ敢テ  
貢ル勿レ

茂予曾て開ク貴國館待ニ供スルノ小史ハ専ラ括商  
ヲ事トシ多クハ細好ノ輩ニシテ貪利弊教屢館人ヲ  
輕侮ス然ルニ貴國政府怡而不顧セノ、如シト予甚  
所歎也

孝源林筆

細好之輩不知目在那人而既知細好之輩所為則何必  
歸咎於朝廷或第俟於好之日方々為好々々

茂貴國一ニノ官吏ヲシテ兩國公幹ノ事ヲ掌理セシメ  
既ニ弊害ノ生ルリリ豈 朝廷其責ニ任セザラニヤ

惟ノニ有志ノ士數名ヲ擔任セハ必ラス此弊ヲカク  
ニ

南 嗚呼兩國ノ間絶絲月ニ尚寧聞スヘカラス況ヤ阻  
隔七年ノ文ニキニ於テヲヤ豈傍觀スヘケニヤ

同心協力以議兩國之欲好豈不欣然哉

南 諾々乞フ此書ヲ給ヘ恐ラクハ尊公ト再會歡好ノ

日アルヘシ若尋交成熟ニ至ノハ我國聘問ノ使ヲ差

サ、ルヲ得テ僕武官ヲ奉シ隨行シ貴邦ノ風土ヲ經

覽スルコト豈快然トラホフシヤ是僕生涯一片ノ素

志ノミ時ニ快活ニ乘シ日ノ没スルヲ不覺將ニ晡節

スヘシ

茂予職舟風ヲ待ツニ尚未々其頓ヲ得ス足下歸闕ア

ラハ再來アニンコトヲ切望ス

南 尚疑フモノアラハ再ヒ來謁スルカ若クハ別員若

クハ書ノ以テ副議ヲヘシ

茂 諾然

從是刀劍絶死等ヲホシ且予ノ寫真一葉ヲ與フルニ

加  
正  
類  
冊

賞賛無極即袖ニシテ帰ル帰途通事福珠ニ低語シ  
テ曰汝カ所納ノ書ニ就テ反重搜問スルニ一疑フハ  
キトク一違フハシ漸次起分スル所アラントス然ル  
ニ汝猶彼人ニ就テ事情ヲ問ヒ若シ吾ニ告ントスル  
旨アラハ克其意ヲ得必ラス明後間上府スハシト黄  
昏出館其夜直ニ東菜ニ上府スト云  
因云南萍源ナルモノハ年對五十有余質朴閑雅ノ風  
彩アリテ其所言市理利然実ニ尋常韓人ノ比類ニア  
ラス今予ニ面シ通交ノ書類ヲ一覽スルニ前ニ通事  
福珠ヲシテ東菜府使ニ投示セシメシ摘要書ト一差  
違アルコトナシ而シテ予カ所説モ亦既ニ浦瀨ヲシ  
テ福珠ニ答示セシメシ口陳書ト一文吾アルコトナシ  
是ヲ以テ彼レ願ル疑塊ヲ解クモノ、如シ且ツ談笑

ノ間彼レ既往ヲ悔ヒ未時ヲ滿成セント欲スルノ情  
色切ニ充溢ス惟フニ予今度渡韓以來暗行御使又ハ  
東菜府使等探吏ヲ放テ頻リニ我カ動静ヲ伺フ故ニ  
我モ亦之ニ應シハ夕投策ス然ルニ我邦昨年来ノ形  
情及ヒ方今台湾ノ一挙等ハ曾テ對馬人ヨリ内外傳  
播シ一ツ漏ラスナシ彼レ殊ニ國論一變交際ノ事ヲ  
掛念ノ時ニ當リ豈警動セザラシヤ故ニ御使府使ヨ  
リ此探状ヲ稟啓シ然ニ政府中有カノモノヲ我ニ東  
菜ニ差シ名ヲ裨將ニ託シ以テ此奉ニ呈ルカ又ハ御  
使隨行中ノ一人ナルコト決シテ内裨將等ノ品位ニア  
ラナラシラ覺ユ予積年奉務ニ焦苦スルモ彼ニ對シ敢  
テ寸意ヲ述フル不能今ヤ悉々ノ説話ニ涉ルヒ願ハ  
快心ヲ得タリ而シテ未時如何ノ如キ同ヨリ豫定ス

大  
文  
類  
冊



ヘカラストト魚トモ恐ラクハ盛意貫徹ノ時ナリニカ  
於茲益々鋒ヲ包シ信懇ヲ表シ投機抑揚以テ局成ノ  
地ヲ占メサルヘカラス豈不陳哉既ニ昨今内外ノ風  
説ニ云奸魁訓導安俊卿ハ付科シ都表ニ推送セラレ  
陪通市崔在守ナルセノ東来ノ囚獄ニ下リ其他後累  
モ亦捕縛ニ就クト惟フニ此事真ナルニ似タリ若果  
シテ真ナル時ハ是モ亦周便ノ地步ヲ進ムノ一端ナ  
ラシ乎

七年八月十九日

森山茂

丙

昨八月十六日内樞將南孝源就館陪通市金福珠

一低語セシ氣向ニ投シ尚再來ヲ促カサニリ為ノ

浦瀬ヲシテ福珠ニ内示セシノシ口陳書

昨昔之一過惟足天幸耶退過之后三思未時則尚有未  
可安頓者茲館長公之帰期既切而帰後若以現今兩國  
之形行至復命之地則國議之所出果不知其如何豈耐  
悶迫成天抵於此等之惰南令監亦既所亮知也方今之  
時投機宜然者不如現職人斯速就館公然議列以施使  
館長公暫緩帰期之道也予夜未益感於公之篤志自奮  
不止然及此議改亦更使此意予南令監以即時回酬可  
也矣

明治七年八月十七日

幹傳官浦瀬

右ノ書ヲ與ヘ置シニ八月廿日福珠及金東憲兩人來

前項日ノ口陳書ノ携へ一昨東萊へ到リシニ南五衛  
 ハ既ニ他出福瑞云案ハ行御使ト調議永川ニ到リ却テ府使  
 ニ親謁スルヲ得タリ然ラ府使ヨリ館人ヨリ告タル  
 事アリテ来リシヤト問ハル僕答フ過日南五衛入館  
 ヲ長ト對話ノ末幹傳官ナル人頻リニ館長公ノ帰期  
 ヲ緩メシコトヲ請ハレシニ館長公曰ク南五衛ハ一  
 時遊覽ノ客トリ假令今内國幹事ノ端緒ヲ見ルモ尚  
 未々期スヘカラス且官衙ヲ長スル人ニアラサレハ  
 我朝ニ向テ帰期ヲ緩シクタシ若果シテ吾カ帰期ヲ  
 緩フヤント欲セハ公然一价ヲ派スルカ若シクハ其  
 意ノ書贈スル可也ト即ケ幹傳官此意ヲ下付セシテ  
 府使曰南五衛ハ今日輕服シテ他出セリ思フニ今

館行ニ供ワル人トシ新訓導ハ七ラス采月初旬我九月中  
 旬下来ノ筈ナリ汝此意ヲ以テ宜シク館長ノ帰期ヲ  
 緩フスルコトヲ周旋スヘシ汝ニ更ニ陪通事ヲ命ス  
 ハシト僕答フ訓導交代ノ上拜命スヘン府使曰訓導  
 安俊卿ハ既ニ有罪ヲ以テ明問ヨリ都表ニ押送スヘ  
 シ何ソ意トスルニ足ラント因茲僕即ケ陪通事ノ拜  
 命セリ府使曰其他當任ニ充ツヘキモノアラハ人撰  
 スヘシト僕答フ從前ノ通事輩ハ皆是在府ノ黨派ニ  
 シテ其可答ヲ辨シクタシ府使重テ曰誰ニテ撰出  
 シテ可アリト炭炭久米慶免ヒラレシ金東憲金哲俊  
 ノ二人ヲ言上ス然ルニ右兩人既ニ昨日陪通事ヲ拜  
 命セリ府使又曰ク来翰中 皇勅ノ文字アルモ於我  
 是非スルノ理ナシト虽は元来我ニオイトヒ國主云

タノ文字ヲ書載セシコトナシ故ニ日本國ニ於テモ  
成ルハク 皇初ノ字ヲ用ヒス換之ニ朝廷朝命等ノ  
字句ヲ以テセラレシコトヲ望ム又兩國書契往來ハ  
外務卿ト礼曹判書ト外務大丞ト礼曹參判ト比等セ  
ハ至當ナラシ乎又番書ノコトハ書契中ニ用ユルモ  
ノハ即所賜ノ銀印ヲ捺シテ固ヨリ可ナリ然ルニ外  
向封印ノ如キハ我邦勅令ノタノ後ヨリ鑄造スル物  
ヲ用フル時ハ舩隻流到ノ際ニアタリ甚ク照驗ノ便  
ヲ得方ホ人民ノ心ヲ安ニスルニ足ラン宜シク幹傳  
官ヲシテ館長ニ由出オクヘシ  
一今日釜山僉使ノ召命アリテ即チ釜山ニ至レリ僉  
使曰館内ノ官負ハ皆外夷ニシテ日本人ニテラスト  
因テ久米炭薪ノ入送中絶セシ由今定テ聞ク時ハ敢

テ齊閣スヘカラスヌヲス追次供進スヘシト虽先  
ツ速ニ炭ニ依柴三十把ヲ搬送セシ汝軍官ト一同ニ  
到リ何人ナリト宜キニ隨カヒ差送ルヘシト即茲ニ  
携帶セリ乃僉使ノ厚意ナリ  
一崔在守トレヒノ頃日東萊ノ園圃ニ下リ最モ嚴シ  
ク桎梏ヲ施シ終ニ飲食スルヲ得ルノミ罪状也ニ答  
問セリト憐フニ不遠斬首セラレニカ且其他三人ノ  
陪小通事モ悉ク入獄セラレ是亦恐ラクハ流刑ニ處  
ヒラル可シ  
右ノ如ク陳述セリ故ニ公幹ノ要領ハ必ス公然議列  
セハ事順成スヘシ決シテ怖シム勿レ且ツ薪炭ノ事  
ハ幾一二名ニ入送スルハ妥當トラス因テ館長ヲ  
ハシメ役々一同ヘ供進シ久米ノ蔽塞ヲ破フルノ實

効ノ顯ハカハ厚意ヲ謝スルニ足ルト福珠此意ヲ承  
ケ明間上府ヲ約シテ歸ル

八月二十日

浦瀬裕

森山茂吉翰 外務大臣少丞宛

八月二十日金山僉使ヨリ旧例ヲ追々薪炭供進ノ儀  
陪通事ヲ以テ申出タリ因テ浦瀬ヲシテ云ハシムル  
ハ先例ニ依レハ役員一俸入送ノ筈ナリ果シテ然ラ  
ハ敢テ其厚意ヲ破ルヘカラス然ルニ昨年来在府等  
ヨリ官員ノ儀ハ供進セザル旨矣リ申乙ノ偏見ノ  
以テ申出タリ貴國若シ官員ト虽トモ外視スヘカラ  
スノ意ニテ行ニトキハ館長ヲハシノトシテ付屬ノ

モノニ至ルマテ公平ニ入送シテ可ナリ然ル時ハ館  
待ノ實効ノリテ稍館長ノ帰期ヲ緩フモントスルノ  
意ヲ表スルニ足ラシ乎通事承諾シテ在館官員ノ列  
名紙ヲ乞因テ左ノ通り書示ス

- 一 館長 一員
  - 一 一代官 一員
  - 一 別禁徒 一員
  - 一 幹傳官 一員
  - 一 三代官 一員
  - 一 警負仕丁小使大工 一員
- 右  
合十二人ナリ

同二十一日陪通事金東憲入館金山僉使ヨリ命アリ

館行ノ炭薪中間ニ懸塞シテ失親ノト久矣甚々不良ノ儀ナリ追テ照例供進スハト雖トモ既ニ府使ノ命モアレハ先ツ不取敢館長以下一縣へ多少供進シテ將來不失親ノ意ヲ表スヘシト即兩品ヲ携来ル故ニ其意ヲ破ラスニテ領之左ノ通書示ス  
更ニ依例見惠薪炭厚意何端是館長之命也

明治七年八月廿一日

幹 傳 官

一又間本日奸魁陪通事程在守ナルモノ、舉家老幼トナク數ヲ盡シテ東萊府ニ縛送家財悉シ没收セラレ殊ニ其妻懷胎ナリニニ猶苦鞭ヲ加ヘラレ肉破レ血送ルニイタルト

右唯今公信緘後申出候ニ付御見合ノ一端ニモ可相

成ト不取敢上申候間郷公閣下へ即速御差出有之度候也 八月廿一日

大隈參議外七名へ回達 丙辰

別冊在韓森山六等出仕公信御回覽御鈴印相成度存候也 七月廿五日

追テ御鈴印濟ノ上ハ早々本局へ御還付相成候様仕度候也

大木 參議 寺 島 參議

山縣 參議 伊 藤 參議

勝 參議 黒 田 參議

伊地知參議

別紙外務省上呈在韓森山茂來信一括供高麗候也 七月廿五日

外務省上申

別紙外務省等出仕森山茂ヨリ、書信昨二十三日到來イタシ候ニ付不取敢爲回進仕候也九月二十四日

森山茂書翰外務省宛

一新訓導玄普運守徳別差玄濟齋儀六月三十一日夜東萊下着、昨三日到任昨日即本館へ入来小生ヲハシメ在勤一同へ初對面ノ式執行直ニ公務ヲ議シ候処是迄中間留滞ノ所縁ハ全ク回訓導ノ落度ニシテ今日ニ至リ貴國ノ情好モ相分リ候ニ付何分兩國御同順便ノ道可爲取計拙者到任即參第仕候趣ヲ以テ毎々序次ヲ立開議ニ及候間從是ハ肯就任ヲ不替過日伺上候畧見込書ノ趣ニ隨ヒ反覆丁寧講明候處役士申ノ春爲ニテ以左渡ニ置候書契ハ本番捧出不

不致事故此マ、難受旨主張イタシ其本意ハ今一應變通ノ線口ノ得ハ夫コリ天子等ノ文字ヲ除大セシノムトノ點策ト觀察候ニ付從是ハ決シテ難相成旨申切嚴シク控問候處願ル困却ノ勢ニ迫リ候ハトモ尚兎角曖昧更ニ結局不相見候間其勢ニ乘シ從是ハ三件ノ問題ヲ以テ決答ヲ促シ候處被事理ニ屈伏終ニ右三件ヲ以テ廟議ヲ伺二十余日ヲ期シテ回酬可致旨込合申開候ニ付白約書爲相認先、段落ヲイタシ候今朝ハ答礼トシテ津瀬等仕所へ從所也差遣ハシ尚別紙イ号ノ趣爲及掛合候處右書ヲ借用イタシ度旨申開更ニ異難不申出候何分此議不相調シテハ爾後東萊府使ノ直對不相成ノミナラハ必ク中間留滞ノ弊ニ逸歩可致後進ノ一端ナレハ是非違リ付度ニ

ノト存候イツレ期月ニイタリ候ハ、何トカ可申出  
 先以右ノ次第ニ依間將來ノ如何ハ差置御奉省官員  
 ニ公符イタレ候丁ニテ此上ハ面略ヲ重シ我カ感意  
 ヲ徹底トシムル一肝要ト存候昨日ノ所ニテハ恰モ  
 敗將ノ降ヲ納ル如ク戦々兢々ノ有様實ニ惘然ノ至  
 ソノ内例ノ曖昧朦朧ノ構ハ候ニ付話中夫是論取イ  
 タシ置候感モ有之小生申向候大綱ハ却テ別紙口号  
 ニテ御承知被下度尤明日ニイタリ三件ノ内何レカ  
 從容回答申出候ハ、隨宜約書取替ハセ小生速ニ上  
 京可仕積リニ候實ハ是夫ノ運ニハ必ラス十日余  
 モ相掛リ可申ト覚悟ノ所不料モ易々纏マリ小生等  
 ノ大幸ト存候何分彼ノ内情切迫ナルハ不待論乍去  
 此訓導ニ沈深狡辯ニシテ曖昧操弄ノ術ニハ長シタ

ルビノト叔方候於茲時ニ火輪船等本地ニ向出沒往  
 來イタレ候ハ、餘程ノ声援ト相成可申准寸古ヲ以  
 テ抑揚ヲ施シ候モ到底充分ノ進歩ハ難出来ト深ク  
 歎息仕居候御閑察可被下候  
 一 壬申ノ秋持渡リ候宗氏田貿易負債ノ分モ近日引  
 渡可申積リニ候然ルニ本邦服礼改革ノ一ニ付テハ  
 彼ニ頑シ性シミヲ抱キ候若シ今突然之ヲ常用イラ  
 シ候ハ、必ス一時阻滯可致カト是ニハ殆ント當惑  
 因テハ禮々沿革論等ヲ綴リ解疑、タメ被示イタシ  
 居候彼レカ頑癖御閑察可被下候  
 一 訓導別差等ハ田前督字ヲ以テ往復イタシ来候處  
 其實我ニ對シ頗ル輕蔑ノ意アルコト、承居候ニ付  
 何ハトヒアレ被我ハ実名ヲ用ヒ候儀故各々実名ヲ

以可有往復者申聞尚旧式ノ手數等種々有之儀ノヨ  
シニ候ヘトモ皆々停止先第一ニ彼所へ出頭セシノ  
夫ヨリ小生寓へ來リ椅子タールニテ接待候処一  
言ノ異論ナク其名薄差出シ候儀日本館慶ト克廿七  
候様回ヨリ瑣々、儀ナク、實地ノ形象御見合、々  
ノ入御聞候

一此度小生渡歸、儀ハ第一探索ヲ以テ主務トイ  
シ候ニ付テハ聾人、探夫ヲ取入候杯頗ル入用モ多  
々有之殊ニ本地ヨリ長考へ向ケ候テ時々別船等モ  
數度差立候儀ニ付御入費モ相嵩可申勿論ニ候へハ  
此段兼テ御聞ニ添置度且庶務局ニ於テモ預シメ心  
得居候様御達シ、程是祈

右ハ昨今ノ大畧ニ御坐候小生儀ハ何、約期ヲ相待

可由ルニ往番一件ヨリ當今支那政府トノ御駈引  
ニイタリ毫モ承知不仕若シ支那ト縊緝相生ニ候由  
トモニ候ハ、本務ニ自然退縮可仕候款ト存候此段  
モ豫シ、申上候間可成ハ撰採御渡ラシ祈上候也  
月五日

イ 辨

夫兩國交誼保存者既三百年矣旧例多及時弊茲茲本  
約訂議之間苟不可不假定往來待遇之例而有急務之  
一件即陳辨如左

凡置本邦領事官及屬官於此館辦理公幹約束人氏故  
領事官與采萊府使修匹敵等對之例常務之外彼此書  
翰往復可以解事務若或照會將申則府使下未又或領  
事官又屬官同往於東萊親詢安議以盡欲好之道是乃



所以重隣誼洽情好也尔未必不可以無此例然而昨霄  
三件之回答亦與兩使親接須要開議也今也尋交商量  
之際至若釀成中間如昔日弊害則忽惹出兩國之危端  
豈得不注意哉右陳辯者礼信之所係重大之所施蓋為  
修好普通之公行也以此意辨明於任官轉達于彼因改  
府合併請回答焉

明治七年九月 日

外務省出仕森山茂

右示幹傳官

口號

九月四日訓導ト談判中申向依節目

一我國ノ 皇ト称ニ勅ト称シ世界万国之ヲ推認ス

而シテ我書取ニ之ヲ書載スルニ何ノ妨カコレアラ  
ム貴國返書ノ如キ其意味回答ニ的然トハ豈文字  
ノ有無ヲ以テ難論ヲ發セシヤ

彼突リ曰ク可相成ハ御同前ニ朝廷ト云フ文字ニテ

御濟ニ板下テハ如何

我ヨリ貴國ハ貴國ノ思召モアルヘシ我ニ於テハ万  
國ニ對スル恰例アリ此等ハ決シテ相談ハ難承

彼レ黙止ス

一我外務卿ハ參議ヲ無ク即貴國ノ左右議政ニ比ス  
然レトモ外交ノ事ヲ總掌スル時ハ貴國礼曹列書ト

等對スヘシ又大丞ハ正殿參判ニ對スヘシ彼曰ク卿  
ト判書ト然リ人丞ハ猶ク四位ナリ我參判ハ正ニ品

ナリト

我ヨリ貴國々王ハ何品ツリ我邦舊幕府徳川氏ノ如  
キ九位ニ位ツリ從一位ノ昇ラス然ルニ久未等對テ  
以テスルハ如何且我外務卿ハ正四位ナリ而シテ大  
清恭親王李鴻章等ニ匹適ノ礼ヲ用テ貴國恭李兩氏  
ニ匹對スルモノ誰ツヤ又我邦ノ位階ハ勲功アルモ  
ノニ之ヲ賜テ貴國清國ノ比ニアラス如何

彼レ亦爾一言ナシ

一彼曰書契ノ印記ハ自印ヲ用フル尤宜シトス然ト  
モ勘合印ノ如キハ我方ヨリ鑄送シテ如何

我ノリ外國ニ航スルモノヲ統管スルハ即本省ノリ  
而シテ外國航行ノ印式アリ貴我往來ノ如キ尤繁キ  
ヲ以テ別一路之ヲ法印記ノ制ヲ定メ其儀本ヲ送驗  
シテ假冒ヲ杜ル何ノ不可カコビアラム

彼レ黙止ス

一彼レ卿ト判書ト大丞ト参判ノコトキ常ニ何等ノ  
事ノ往復スルヤ

我ノリ實際上ノ華百節百務隨時應事何等ヲ書載スルヤ  
未然ヲ計ルヘカラス

彼黙ス

一歲遣船ハ再々御渡ノリヤ使節ノ往來如何

我ヨリ使節ハ格立クルハ必ク往來スヘン原  
歲遣ノ定趣タルヤ兩國有無相通スルノ意ヨリ出ル  
因テ貴國之ヲ請ハルニ於テハ名義ヲ明ニシテ妥  
議スヘシ

彼レ然ラハ之ヲ乞ハルニハアラスヤ我輩ヨリ強  
ユルノ理ナシ

彼領諾

一使者ノ往來ハ如何

我ヨリ交隣ノ大誼ニ関リ又ハ互ニ國主ノ慶吊等ヲ訪フ是共ニ往來ナカルヘカラス

彼然ラハ宗氏又ハ外務卿一家ノ慶吊ハ如何  
我敢テ不及也

彼深氏送還ハ如何

我ヨリ本館ニ領事官ヲ置キ百務ヲ辨理ス因テ領事ヨリ東萊府使ト書通送還ノ例ヲ取メテ可ナラム

彼レ諾

一我ヨリ是下勅ニスレハ旧約ママノ語ナリ予ニ於テ是レ承クヘカラス

彼ヨリ三百年ノ久シキヲ保ツモ條約ナリテナラズ

一萬世不馬ノ約條ト云フハ

我決シテ不然万世不馬ノ約條ト云フモノハ即惟約也貴國ト我邦トノ約條ノ如キ即常約ニシテ隨時制

宜景照以承發回ニシテ全備ニシテ其數ヲ知ラス而シテ其約例多クハ皆默約ニシテ何ノ万世不馬ノ語

ヲ呈スルヤ思フニ貴國ハ約例ノ尊テ好誼ヲ輕ニスルカ如シ如何

彼黙止ス

一彼レ兩國ノ事ハ宗氏ニ尊ホトラスハ一テノスヤ我ヨリ不然一箇ノ官吏ヨリ此節ニハ領事官ノ置

テ事務ヲ辨シ東萊府使ニ等對スヘシ因テ東萊ニヒ往來ヒサレヘカラス

彼レ然ス

一彼レ將來順使ノ道ヲ計ル如何

我々申ノ春我西シテ以テ相渡セシ書契ノ返書ヲ遣  
ハシ即チ外務卿ト礼曹判書トノ往復書ヲ奉シ我々  
リ来ルケ貴國ヨリ渡ルカ期ヲ論定ムルノ急務トシ  
此事定ツテ後修好條規ニ及ツ其奉約ノ如キハ全權  
ニノヲ行ハハ假定スヘカラヌ

彼々申ノ書契ハ尚未キ奉書ヲ不持今日マラ茲ニ留  
滞スル所以ノモノハ尚 朝廷ニ意味アリテノコト  
僕等ノ知ル所ニアラヌ因テ其留滞ノ書契ヲ捧出シ  
クダシト 亦此ノ交方仁貴論スルニ候レ理ニ強ス  
ヒニトト計ハトモ 暇暇網ノ術策ヲ用ヒ一度送  
ス因チニ題ヲ揚ケノ意アルコト 候ノリ然ラハ我々  
フ所ヲ貴政府ニ轉達シ日ノ期ニ決答アルハ一第  
一申ノ書契ノ受クルヤ否ヤ若受ルトキハ期日決答

ノ而本書契交換ノ事

第一石書契難狀ノ事俾テハ更ニ外務卿ヨリ判書  
ヘ大丞ヨリ参判ヘノ新撰書契ヲ携ヘ来ラハ之ヲ受  
ケ必ツス返書差出スヘキ旨ノ事

第二若シ前二條難狀アノハ全權使節ノ東京ニ派シ  
議定スヘキ旨ノ事

彼レ終ニ理ニ届シ曰ク然ラハ 朝廷ノ決ヲ仰クハ  
シ

於茲約定書ノ認ノホムル如左

一壬申年書契回答成否若成則直差回書而書契交換  
之事

一同意書如有難安處以至不持之理則更候自貴国外務

御對于我札曹判書自外務大臣對于參判之新書又列  
定幹使資收養府相接議定事

一又有難便之端自札曹成書與送聘使于東京願定期  
月以回答事

右三件事中一事擇定之意因今日公論備盡轉達于  
朝廷之計而千里往還必不可逾二十余日矣唯冀竣之  
焉

甲戌七月二十三日

訓導 玄 昔運

別差 玄 濟齋

外務省出仕 森山茂

尊公

昨日差出之人名簿左

記

一通政大夫行訓導 玄 昔運

一通訓大夫行別差 玄 濟齋

右

今日到任之事

甲戌七月廿二日

日本館廳

外務省六等出仕 森山茂

七月九月五日

外務省 函

別紙朝鮮國在說雜問書取森山六等出仕之日差越候  
從彼國內敷兵例ノ談話等相見候間為念廻進仕候

也 九月十五日

近況雜聞

朝鮮國ハ曠テ倉粟ノ蓄積薄ク年若シハ歉ニ過セ  
 ハ忽チ全國ノ疲弊ヲ成シ是蓋シ通例ナリ然ルニ昨  
 秋冬燕甚ク凶ニ屬シ今年ノ麥作稍豊トルトイハド  
 之雖霖日ヲ見セルト月ニ充テ之ガクノ野麥ノ  
 腐損夥シク因テ米價随テ騰リ方今公館ノ近隣米穀  
 殊ニ乏シク僅カニ麥ヲ以テ飢ヲ波キ殆ント飢饉ノ  
 形行一似タリト故ニ節商等ノ云米價若シ韓錢四十  
 文ノ余ニ涉騰スルニイタフハ之ヲ内地ヨリ運輸シ  
 ノ販賣スルニ利ヲキニアラスト而シテ今大概四十  
 文ノ内外ト云

同日僕韓地ニ往來スル既ニ數次今度淺韓潛心彼カ

形情ノ觀察スルニ其着キモノハ彼ノ人上下トナク  
 困乏ノ色アリテ其中分以下ノ輩ハ憔悴ヲ極ノ一般  
 病者ノ如シ也此程館外ニ道途スルニ耕夫牧童等  
 數人相會スルアリ因テ途接ニイタリ之ヲ見ルニ生  
 松ノ白皮ヲ喰フナリ年長ノ輩ハ少シク耻ル色アリ  
 トイハドモ幼少ノモノハ敢テ頓着ナク突ニ山狗ノ  
 窟内ニ羣スルニ均シ又館内ニ出入スル所ノ雇夫數  
 ト人館商ニ復セラレノ貨物ヲ運搬スルノ間一夫腹  
 痛ヲ起シ忽チ大地ニ絶倒セリ傍ヲノモノ之ヲ見テ  
 此奴昨昔河豚ノ食ヲ因テ暴死スルトラント驚々声  
 ンテ爰ノ道キ數ノ頓ルモノトシ漸ク傍人ヲ吃シテ  
 之ヲ肩ニシ冷風ノ地ニ附サシメ治劑ノ施シ活命ヲ  
 得セシメタリト然ルニ其薄痛ナルヲ貴ルニ上下貴

賤トモ皆此風俗一シ、悲難相救フト云ノ、意ハ毫  
 毛之レナシト嗚呼此人ニシテ此政府アル不亦宜乎  
 一彼ノ兵卒、通事等ノ諾ニ我國兵制同ノ如シトイハ  
 トモ凡數百萬アリト曰テ其制ヲ問ヘハ所謂團丁  
 ニ均シク譬ハ年十六歳ヨリ五十歳ニイタリルハ兵  
 役ニ賦シ一錢ノ給一粒ノ秣ヲ與ヘス或ハ半年或ハ  
 三四月ノ間ニ一團ツ、豫線ノ場ニ出ツト且日本ノ  
 兵士ハ幾千ニシテ其俸給ノ如キ如何ト因テ豫カシ  
 ノ我兵制ノ畧解スルニ甚致伏且曰我國ノ兵士ハ早  
 竟公役ト買部ハ即純兵トリ開ク砲術ノ如キハ多ク  
 西洋ノ風ニ倣ヒ利器頗ル多シト今館内ニ備フル所  
 ノ平臺ノ巨砲田宗氏ノ所製ノ野戰砲ナリハ無類ノ器械  
 ニシテ我ニナイテハ甚々珍譽スル所ナリ我國未夕

如此ノ名器ナシ今若シ此精銃ニ對スルトキハ我敢  
 テ抗スルノ術ナシト又曰火絶ヲ不用六聯發ノ拳銃  
 アルハ實ニ驚一堪タリト因テ我仰銃器ニ富タルコ  
 ノ示ム一奇異ノ思ヒセリト云  
 一過日予ヨリ通事在在守ニ喚フル所ノピストル  
 ノ精製ヲ見テ在在守等驚膽口舉而不合ト云リト是果  
 シテ東萊釜山ノ兩使ニ送呈スニナラン  
 一曾テ一通事ノ話頭ニ我國新製ノ大砲ハ多クハ鉄  
 ノ合ニ成ニシテ甚巨ナリトイヘドモ自在ニ運轉ス  
 ル能ハス且之ノ連發スルトキハ藥力ニ破裂スルモ  
 ノ居多也因テ砲手等之ヲ扱フニ尤忌念トキニアラ  
 ス小銃ハ火絶ヲ用ヒ日本製ニ異ナラズ唯其燧管ナ  
 キノミ故ニ雨中連射シ暫時有テ後又之レヲ用ルル

筒中潤濡トシテ散ノ御祭セス今若シ霖雨中有事  
 臨マハ大砲小銃ハ前ノ如ク加フニ角弓ハ雨滋ノ  
 ノノ一考カヲ耗シ決シテ飛奔セズ突ニ意料ノ及ハ  
 ナル所ナリト曰テ其大砲ノ使用ヲ問フニ砲手遠方  
 ヨリ火ヲ指シテ遠逃シ破裂ノ難ヲ避クト此言甚々  
 愚ニ過タルニ似タレトモ惟フニ真状左モアルハ  
 一 本年熟麥植田ノ秋ヨリ氣候不順今炎暑ノ候トイ  
 ハトモ通年ニ比スルニ頗ル冷坑ヲ帯ヒ冬苗ヲ害ス  
 ル一不少殊ニ八月六日ヨリ起リ八日ノ夜ニイタリ  
 暴雨中軸ヲ流シ颶風瓦石ヲ躍ノス岸側ノ棚屋ハ怒  
 濤ノタノニ打破セラレ我館守ノ毀損モ亦巨多也隣  
 氏等相救シテ云本年ノ凶救思ヒ道ルハシト今既ニ

飢饉ニ関リ下氏困乏ノ時一當リ亦如斯荒歳ノ徴ア  
 ルハ可憐ナリ殊ニ館内ニ備役スル所ノ藪人等腐臭  
 鼻ノ穿ツハト取食ヲセ甘シ食ヲ申美饌ノ如シ因テ  
 其醜態ヲ指サシ問フニ頃日米麥トモ一欠乏ニ中今  
 以下ノ輩ハ尸々皆麥汁ヲ飲シテ之ノ喫ニ漸ク枯腹  
 ヲ送スト突ニ困弊維谷ノ状アリ故ニ我試ニ彼ニ示  
 シテ云我國同ヨリ未救ニ富ム惟フニ今茲一數万石  
 ヲ運搬シテ之ヲ汝等ノ貧民ニ施行シ或ハ汝カ政府  
 ニ之ヲ貸賦セハ窮迫頓ニ脱セン豈不善哉彼云今貴  
 國ノ周急ヲ得テ一時痛弊ヲ免カハトイハトモ若  
 シ他年貴國此災ニ過スルヲアラハ我之ヲ救酬セザ  
 ルハカフヌ是我紀ノ為シ得ル不能所也今饑莩相臨  
 ハモ悉天災ノミト云頭愚モ亦甚哉